
月並町の魔法使い

其場凌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月並町の魔法使い

【Nコード】

N9908S

【作者名】

其場凌

【あらすじ】

せんせーい、彰子って誰ですか？ 途端に慌てふためく先生に、あきちゃんは確信した。 大好きな先生は、きつと魔法使いだ。

魔法使いがいる、小さな田舎町で起こる小さな恋の物語。 お願
い、今はまだせんせーい服を脱がさないで。 (あらすじ しろ
あめハツカ 様)

セーラー服を脱がさないで(1)

先生が、おかしくなってしまうんじゃないかと思った。

事件が起こったのは夏休み直前。二学期末のテストを間近に控えて、教室内はどことなくピリツとした空気だ。

私は窓際の、日当たりの良い席で先生の話を一息懸命聞くフリをしながら実のところその顔ばかり見ていた。先生は、それほどイケメンってわけじゃない。背は高いけど、いつもポロシャツにチノパンで、近所をちよつと探せばすぐに見つかりそうな、どこにでもいる普通のお兄さんだ。

でも、その気安さが良いのか、化石みたいな先生ばかりのこの学校内ではちよつとした人気者だった。私のほかにも先生のことをイイって思っている子はたくさんいる。でもね、メガネの奥の目が真っ黒じゃなくてちよつと青みがかっていることを知っているのは私だけだと思う。だってほかのどんな女の子も、あんなに先生に接近できるはずがない。

そんな優越感に浸りながら、摂関家の壮絶な権力争いについて説明する先生の顔を見ていた私は最初、教室内のざわめきの理由を理解できていなかった。

「せんせい、彰子あきこって誰ですかー？」

くすくすって笑いながら、クラスメートが声に出して聞いた。

黒板に書かれているその名前を、指さして。

先生は一瞬なにを言われたのかわからないって顔をしてから、示された黒板を振り返る。赤いチョークで書かれた「彰子」という文字を見て、先生はそりゃもう誰が見てもしっかりわかるほど動揺した。顔を真っ青にして、あわてて黒板消しをひつつかんで、赤い文字を消す。勢い余つてとなりの藤原道長まで消してしまったけど、先生はそんなことにも気づいてないみたいだった。

「ごめん、間違えた」

照れたように笑う先生に、教室内は和んだけれど、私はそれどころじゃなかったんだ。

だって、彰子って。

それからだ。先生は時々ちょっとだけおかしくなった。

黒板に文字を書くとき、チョークを持つ手を一瞬止め、ゆっくり、震える手で書くようになった。授業中にぼつとすることが多くなった。それから、時々黒板に「彰子」の名前が現れるようになった。何度となく。

私はその名前を見るたびにぎゅっと胸が締め付けられる思いがしたんだ。

先生は、どうしちゃったんだろう。

そればかりが気になって私はテスト勉強どころじゃなかった。テストが始まって、授業はなくなったから先生の「彰子」の文字を見ることもなくなったけど。

午前中でテストを終えて家に帰った私は必死に数学の演習問題を解いていたけど、そんなことより気になるのは先生のことばかり。「ダメだ！」

教科書とノートを一斉に閉じて、シャーペンを放り投げて、なんにも持たずに部屋を出る、のは面倒だったので、いつもやっているように押入から茶色のローファー引っぱりだして、二階の窓から瓦を踏み外さないようにゆっくり屋根の端っこだまで這って行って、庭の大きな木に飛び移った。セーラー服のスカートを引っかけないように、気をつけながら。

私の家はちよつと大きい。ちよつとなんてもんじゃなくのかもしれない。大きなお屋敷のわりと奥のほうにある私の部屋から玄関までは長い廊下を歩かなければいけないし、居間を避けては通れないから、祖母に見つかって、そんな格好でどこに行くんだなんてとう

るさく言われるに決まっている。そんなのごめんだった。

広い庭を突っ切り生け垣を乗り越えて外に出る。良い天気だった。これで明日もテストでなければ最高なのに。

行く先は決まっていた。家から徒歩2分。商店街の隅っこの、喫茶またたび。カフェと呼ぶには古ぼけすぎていて、絶対に同級生は来ないだろうこの場所が私には好都合だった。平日の昼下がりなんてそれこそ訪れるのは近所のおじいちゃんおばあちゃんくらいだ。

中は適度にひんやりとしていて、コーヒーのおいがしていた。喫茶店のマスターにしてはむさ苦しい髭面のおっちゃんが入れるコーヒーの味がここのウリだった。私はここでコーヒーの味を覚えたんだ。

「こんにちはー」

がらんがらんと重たい鈴の音をさせる扉を開けて中をのぞくと、髭面マスターがこちらを見てにつこりと笑った。

「今日は早いな。サボりか？」

「違うよ！家は抜け出すけど学校はサボらないもん。ね、おジイいる？」

「いるよ。いつもどおり、パソコンいじってる」

くいつとマスターが親指で示した先は、大画面で薄型の最新デスクトップがある。この店は見た目はレトロそのものなのに、なぜか全部の席にLANが完備してあって、パソコンを持ち込めばインターネットができた。だから、それを知っているサラリーマンには案外、重宝されているのだという。生憎とこの町はビジネス街からは離れているので、利用客は少ないようだったが。一つだけあるデスクトップ席には、大抵は固定客がいた。おジイだ。

「おジイ、なに見てんの？」

もう九十歳だというおジイはマンガの中に出てきそうな真っ白な髭を蓄えた、見るからに正しくおじいさんだ。曲がった腰でパソコンの前に普通に座ると、画面に近づきすぎてしまう。真っ白の眉毛がやけに長くて、瞼が半分くらい隠れていたの、画面なんか本当

は見えてないんじゃないかと疑いたくなる。

「グーグルアースじゃ」

おジイはパソコンの画面をクリックして私に見せてくれた。

「ここが月並町じゃな。駅がここ、商店街、喫茶店はここかのー。ほれ、趣味の悪い赤い屋根が見えるわい」

「悪かったな悪趣味で」

ちょうど私の水出しコーヒーを持ってきてくれたマスターが、渋い顔で文句を言った。

おジイはそんなこと聞こえてませんみたいな顔して、グーグルアースを使いこなしている。

「この町は綺麗に山に囲まれとる。小さい盆地なんじゃな。線路が通って国道もつながって大分切り拓かれとるが、山を越えるんは大変じゃ」

「ふうん。中学校はどこ？」

「北じゃな、この山の上に見えるじゃろ」

おジイはこの町の話をするのが好きだ。

ずっと昔から月並町に住んでいるからかもしれない。

言い忘れていたけれど、おジイは私の祖父ではない。私の家もずっと昔からこの町にあつて、おジイの家とも仲が良かったから私が小さい頃から知っているってだけ、親戚とかそういうんじゃない。

「高校は？」

「町の外じゃからな、もつと東のほうじゃ」

そう言つて、おジイは町を東西に横切っている線路に沿つて、マウスを右にずらす。画面に入りきらないところに、私が今通っている学校はあるらしい。

そつだ、学校。

「ねえおジイ！ 魔法使いはこの町以外にもいるのかな？」

私のいきなりの質問に、おジイはすぐには答えなかった。まあ、普通の人だったらまずこの質問の意味そのものがわからないだろう。ただおジイは普通の人ではない。

「……おらんわけではないがの。見つけたんか？」

おジイは曖昧な答え方をしてから、尋ねてきた。これには私も曖昧に首を傾げる。

「たぶん。そうなんじゃないかと思うんだよね。でも、分かんなくて、こう、てつとり早く見分けられる方法とかあればいいのにな」

おジイは「魔法使い」だ。けれどもべつに黒いとんがり帽子をかぶっているわけでもなければ、黒猫を従えているわけでもない。足が悪いので杖はついているし、白い髭もそれっぽくはあったけど、見た目は本当に普通のおじいさんだ。

「見分ける、か。方法がないこともないがの。だけど知ってどうするんじゃ。もしかしたら相手は隠しとるんかもしれん」

本当！？と身を乗り出しかけた私に、おジイは眉毛に半分隠れた鋭い目を一瞬、こちらに向けてきた。おジイは優しいんだけど、時々厳しい。魔法使いの話だから余計に、なのかもしれないけど。

「どうって……助けたいんだもん。たぶんね、先生、自分が魔法使いになっちゃったってこと、気づいてないんじゃないかな」

おジイみたいな魔法使いが側にいるなら別だが、普通の人は、ちよつとおかしなことが起きたからってそれで自分が魔法使いになつてしまったなんて思わない。

だけど、この町ではちよつと違う。

言っておくけど、月並町のみんながみんな魔法使いのことを知っているわけじゃない。

知ってても、昔からの言い伝えだつてバカにする人もいるし、外から来た人はほとんど知らないはずだ。おジイや、私みたいに古い家の人間は知っているし、実際に魔法使いだったりするけど、そうじゃない人のほうが圧倒的に多いんだ。これは別に最近そうになったわけじゃなくて、ずっと昔からそうだ。魔法使いは一定数いて、ずっとひっそりと暮らしている。減るでもなく、増えるわけでもなく。「わざわざ気付かせてやる必要もないんじゃないよ。知らんほうが幸せなこともある」

おジイの口からそういうことを言われると、そんなんじゃないかって思ってしまう。

そりゃ突然、自分が魔法使いですなんて言われたら、すぐには信じられないだろうし、意味が分からないだろう。

「でも先生、苦しそうで……見てられないよ」

「恋、じゃな」

「ふご!？」

おジイが急に改まってそんなことを言うので、私は思わず変な声を出してしまった。

おジイにはなんでも分かっちゃうんだなあ。それとも私がバレバレなだけ？

「知って対処ができるならそれもいいじゃろ。まあとりあえずは本当にその先生が魔法使いなのか、というところじゃな」

おジイはあごひげを緩く撫でて考え深げな口振りで言うと、その手をキーボードへと伸ばした。そして、ものすごい早さでタイピングを始めた。当然ながらブラインドタッチだ。

「おジイ、なにやってるの？」

私は現代っこのくせにどちらかというところパソコンには疎い。

「スカイプじゃよ」

おジイはこともなげに言った。ちょうど協力を頼めそうな人がオンラインだからと。

「へー。おジイ、スカイプもやるんだ」

「スカイプなら会話もできるしの。タイピングは疲れるわい」

華麗な指裁きを見せたあと、おジイは皺だらけの手をもみもみしてた。うーん、この調子だとツイッターに手を出す日も近いのかもしれない。案外もうやってたりして。

「お、返事が来たぞ。すぐ来れるそうじゃて」

「誰なの？」

おジイのパソコンに表示されている登録名は「メガネ」だった。変な名前。

「来れば分かるわい」

数分もしないうちに、喫茶店の扉が開いた。

入ってきた人物はメガネをかけていなかった。だけど、迷わず奥のデスクトップまでやってきて、おジイを見つけると軽く手を挙げた。隣の私にも気付いて、愛想良く笑った顔は、うん、今風のイケメンだった。ちょっとつり上がった涼しげな目は先生とは違うタイプだったけれど。歳は先生よりも若い。二十歳くらいに見えた。

「ジイさん、どうした？ 俺に手伝ってほしいことって？」

「大学生なんぞどうせ暇じゃる。アルバイトせんか？」

「いや、ちゃんと授業あるし、バイトだつて別でしてるし」

彼は文句を言いながらもおジイの頼みを断る雰囲気はなかった。

「この子、見ればいいの？」

むしろ今すぐやるよ、という感じで、彼はおジイに尋ねる。この子、というのは私のことらしい。

「いやいやこの子は違うんじゃない。見てほしいのはこの子の恋の相手じゃよ」

「おジイ！」

さすがに初対面の相手の前では恥ずかしすぎる。あっさり暴露しないでもう！

「長い間生きてるくせにまだ乙女心が理解できねえのかジイさん」

「今度ウィキペディアで調べてみるかの」

二人はずいぶん仲が良いみたいで、遠慮ない口調で言い合っていた。私が顔を真っ赤にしているのをよそに。

「ねえおジイ、本当に先生が魔法使いかどうか分かるの？」

失礼かとは思ったけど、私は半信半疑で目の前の彼を見た。

「できるとも。吏一はそういう魔法を持つとる」

ああやっぱり、この人も魔法使いなんだ。おジイの周りには魔法使いばかりだ。私は妙に納得した。

「先生はまだ学校におるかの。しっかりやるんじゃないよ、吏一」

「学校かよ」

吏一君はちよつといやそつな顔をしたけれど、今さら行くのをやめるとは言い出さなかった。

「行って確かめておいで」

「うん、ありがとう。おジイ」

おジイの骨と皮だけみたいなの首元にちよつとだけぎゅって抱きついてから、私はお礼を言った。

これが、物語の始まり。

私の恋の物語。

そして、私の町の魔法使いたちが、決して派手ではないけれど、密かに活躍する小さな物語だ。

セーラー服を脱がさないで(2)

俺はジイさんには逆らえない。

べつにジイさんが強い魔法使いだからとかそんなんじゃないで、単純に借りがあるのだ。

よくある話だが、俺が昔いわゆるやんちゃをやって、親からも友達からも見離されていたとき、ジイさんだけは俺のことを見捨てずにいてくれた。それで俺は大学に行けるほどまともに戻れたわけで、ジイさんがいなかったら俺の人生は全く別のものになっていただろう。

だから、ジイさんの頼みならば断る理由がなかった。それに、運がいいことに助手席に乗る女子高生は結構可愛い。彼女が通う隣町の高校まで、電車よりも車の方が早いからと助手席に乗せて、いや、べつに変なことをしようなんて気はさらさらない。俺はジイさんを裏切ることだけはしたくないから。

「名前なんていうの？」

緊張しているのか、表情の硬い彼女の横顔をちらりと盗み見てから、俺はなるべく優しく聞こえるような口調で話しかけた。

「……おジイたちは、あきちゃんって呼ぶよ」

答えには、言葉を選ぶような妙な間があった。どことなく、フルネームは？とは聞きにくい雰囲気だ。警戒されているのか、あるいは名前を知られたくない理由が何かあるのか。俺の考え過ぎか。

ジイさんの周りは大抵、なにかしら複雑な事情を抱えている人が多いから、俺はあまり気にしないことにした。

「あきちゃん、先生が魔法使いだって思ってたんだって？」

隣の少女が無言で頷く。癖のあるショートカットの毛先が、ふわりと小さく揺れた。

「俺、まだ魔法使いのことよくわかんねえんだけど、あきちゃんもそうなの？」

俺が魔法使いになったのは、実はほんの3年前のことだ。魔法使いになるつつつても、別に何か修行をしたわけじゃない。呪文を覚えただけでも、箒で空を飛べるようになったわけでも。

魔法使いになるには、何かきつかけが必要らしい。俺の場合は、大学受験のストレスだったようだ。たぶん。おそらく、そうじゃないかと思っっている。

「分かるんでしょ？」

あきちゃんは、思いのほか挑戦的な口調で返してきた。

「いや、眼鏡かけねえとわかんねーんだ。あきちゃんはいつから？」

「小学校6年生のとき。……吏一君、ねえ、どんな魔法が使えるか、とかも分かっちゃうの？」

「人の魔法のこと、あんまり聞いちゃいけないんだってジイさんは言っただよ」

あきちゃんはこちらを振り向いた。斜めに流した前髪の間隙から、ぱっちりとした大きな目が見つめているのを俺は運転に集中しているフリをして気付かないように努めた。

魔法使いは、自分の魔法のことをあまり人に喋ってはいけない。

ジイさんから教わったことだ。多くを知られると悪用される可能性も出てくるから、なるべく知られずにいるならそれが一番いいんだと。

年寄りの言うことは聞いておくにかぎる。まあ、あきちゃんみたいな子に教えたって害になるとは思えないけど。

「拗ねるなよ。あきちゃんだって、俺が聞いても自分の魔法のこと言わないだろ」

「吏一君、彼女いるの？」

突然話をころつと変えた彼女に、俺は一瞬ついていけなかった。女の子ってわかんねえな。

「もしいたら、いくらジイさんの頼みでも女子高生を助手席に乗せて不用意に走ったりしてません」

残念ながら。

「そっか、そうだよね」

「こら、納得するな」

「もつたいないね。吏一君かっこいいのに」

あきちゃんも慣れてきたのか、急に素直になった。そうだろう、と答えかけた俺を無視して、彼女はほかの誰かを思い出したらしい。

「先生の方が、かっこいいけどね」

その言い方がちょっと誇らしげで、いじらしくて、なぜか俺の方が照れる。

「そんじゃまあ、俺よりかっこいいという先生の顔を拝みに行きま
すかね。」

国道をひたすら西へ。

隣町へと抜け、途中で県道に逸れて川沿いを北上すると、あき
ちゃんの通う高校はすぐだ。

結論から言うと、あきちゃんの好きな先生はそれほどイケメン
でわけではなかった。正直、俺の方が勝ってる。

社会科準備室の窓から俺とあきちゃんは不審者よろしく中をのぞ
き込み、先生の顔を拝見することに成功したわけだが。

先生はまだ二十五歳だというのにもう少し老けて見えた。あき
ちゃん曰く、本当はもっとカッコイイのだそう。ただ、ここ数週間
でずいぶんと老け込んでしまったのだと。

「悩んでるんだよ、先生は。自分が変なんじゃないかって」

ああ、そうか。その気持ちは分かるよ。

魔法使いならば、きっと誰もが一度は通る道だ。俺だってジイ
さんがいなければ、受験ノイローゼで自分の頭がおかしくなっちゃ
まったんだと思って狂っていただろう。

「吏一君、先生を助けてあげて。魔法使いだっということが分
ければ、救ってあげられるかもしれない」

あきちゃんが期待のまなざしを俺に向けてくる。まったく、恋
する女の子の視線はなんでこんなにもキラキラと曇りないのだろう。

「任せなさい」

頼もしい返事とともに、俺は胸ポケットから眼鏡を取り出した。
俺の魔法は、これがないと始まらない。

スクエアタイプの黒ぶち眼鏡には度が入っていない。だけど、かける少しだけ、世界が変わった。

彩度の落ちた世界の中、見えないものが見えてくる。

先生の周りには、ぼんやりと赤い色が泳いでいた。

正解。

「魔法使いだ」

見分け方はわりと簡単だ。普通の人間の周りには、なにも色がな
い。

「本当に！？ 先生、魔法使いなのです！？」

少しだけ声を大きくしたあきちゃんの方を見ると、彼女の周りにも色が見えた。彼女のそれは、海の色だった。

「間違いないよ。色が薄いから、たぶん最近なっただけだと思っ
何につて、魔法使いに、だ。

「何があつたんだろ……」

魔法使いになるには何かきっかけがあつたはずだ。あきちゃんは、
先生がなんの魔法を使えるのか、ということよりもそちらのほうに
興味があるようだった。いいけどね。

「あなたたち、何かご用かしら？」

後ろから、不意に割って入ったのは少し強めの女性の声。

「あなた、卒業生？」

私服で茶髪の俺をじろじろと見て、教師なのだろう。女は容赦

なく問いかける。俺は上手い答えを探しながら、隣のあきちゃんに
目を向けた。教師もつられるようにしてあきちゃんへと視線を移す。

「あら、あなた、学年章がついてないわね。何年生？」

「一年生です」

「何組？」

「二組です」

「本当？ 二組なら受け持ちクラスだから大体の子の顔はわかるは

ずなんだけど……」

女教師は怪訝そうに眉をひそめている。あきちゃんの顔をじつと見ようと距離を詰めたが、あきちゃんはさっと俺の背中に隠れるようにして俯いた。

「吏一君」

あきちゃんが俺の服の裾を引っ張る。助ける、という意味なのかと思っただが、違った。

何が起こったのか、俺はよく理解しないままに物凄い力で引っ張られて、走り出していた。

前に行くあきちゃんが俺の手を取って走っている。あきちゃんの細い手は思ったよりも頼もしく、しっかりとしていた。ていうか、握力が強すぎて痛い。そして驚くほどに、足が速い。

俺は情けないことに彼女に引っ張られるままだ。

女教師など当然ついて来られるはずもなく、あっという間にまいて学校の外に出てしまった。

「あき、あきちゃんっ！ちよっ、ストップ、止まって！」

俺、もうダメ。息も絶え絶えに訴えるとあきちゃんはようやく止まってくれた。死ぬかと思った。俺は必死で息を整えているというのに、あきちゃんは何もなかった顔をしている。

「あきちゃんて……陸上部、とか？」

「違うよ」

あっさりと首を横に振って否定するあきちゃん。じゃあこの違いはなんだ。これが10代の力か。

これだけ足が速かったら、相当いいところまでいけるんじゃないか……。もったいないなと思うと同時に、高校時代に部活動などやろうともしなかった自分が言えることではないなと思ひ直した。

それよりも、

「あきちゃん、べつに逃げなくても、適当に誤魔化せばよかったんじゃないの？ あきちゃんはちゃんと生徒なんだしさ」

「……うん、そうだね。ごめんね、吏一君。私、全然頭回らなかつ

た

どこか自嘲気味のあきちゃんは、話をそらすように息をつく。

「あーあ。先生、やっぱり魔法使いだっただね」

「どうすんの？」

あきちゃんは乱れた髪の毛を手櫛で整えながら振り向いて、ちょっと困ったような顔をした。

「先生に、魔法使いだってこと言うの？」

重ねて問う。

「……うーん、吏一君、お願いがあるんだけど」

そう言っつて、可愛らしく小首を傾げるあきちゃんの願いを、俺は断ることなどできるはずもなく……。

翌日、俺は再び先生に会いに来ることになる。今度は一人で、だったが。

仕事を終えて帰宅する先生の後をつけるのは難しくはなかった。

先生の自家用車はよく目立つ緑色をしていたし、国道に出るまで道は一本だ。月並町に入ってほどなくして、先生はアパートの下に車を止めた。

さて、どうするか。

近くのコンビニに車を止め、牛乳とあんパンを調達。一回やってみたかったんだよな、張り込み。

あきちゃんのお願いはこうだった。できるかぎり先生を助けたいが、自分の存在は知られたくない。だから代わりに、俺になんとかしてほしいと。

要は丸投げだ。

そのいじらしいお願いを二つ返事で引き受けてしまった自分も自分だが。

あんパンを牛乳で流し込んで、一息つく。時刻は九時を少し回ったところだ。

「そろそろ行くか」

あれこれと作戦を練ってみたものの、見知らぬ自分が先生に接近する良い方法など残念ながら何も思いつかなかった。正攻法しかない。

佐々倉と表札のかかった扉のチャイムを鳴らす。

「ごめんくださーい」

なるべく不審者にならないよう、明るい声で呼びかける。心の準備はしていたはずだった。

しかし、

「はい」

応えたのは高い声。

同時に、扉から顔を覗かせた女の顔に、俺は用意していた台詞をすべて忘れた。

「あら、あなた！」

「……」

「夕方学校にいた子よね？」

「……すみません」

強い口調と視線に反射的に謝ってしまう。そもそも教師という人は種は苦手だ。それが気の強そうな女教師ならば、なおさらだ。

落ち着こう。ここは佐々倉先生のアパートだ。それは間違いない。ではなぜ、先ほど学校で会った女教師がここににいるのか。

答えはひとつしかない。

「ここ、佐々倉先生んちですよね」

「……佐々倉は、少し外出してるわ。あなた、一体どういう……」

「あ、俺、佐々倉先生……佐々倉先輩の、後輩です。後輩。今日学校に行ったのも先輩に用があったからで……一緒に居た子は親戚なんですけど、実はあの子、佐々倉先輩のファンなんですよ。恥ずかしくて逃げちゃってすみません」

一気に喋ってから、勢いよく頭を下げた。嘘は得意ではない。すぐ顔に出てしまう。頭を下げたおかげで表情も隠れたのが幸いだっ
た。

「……そう、なんだ。じゃあ、あがって待ってなさいな。すぐ戻って
てくると思うから」

「えっいや、そんな、夜遅いですし出直してきます！」

「わざわざ訪ねてきてくれたんでしょ？ 悪いじゃない。いいから入
って。ほら、早く」

教師というのはなぜやたらと世話焼きな上に人の意志を無視しが
ちなのだろう。偏見たっぷりなのは認めるが、だから、苦手なんだ。
上手く断れずに部屋にあがるはめになった俺は、コーヒーまで出
されてしまった。逃げるに逃げられない。

先生が帰ってきたら、嘘は一発でバレてしまう。

先生の部屋は男の一人暮らしの割にはきれいに片づいていて、目
の前にいるこの女教師がこまめに訪れているんだらうという気がし
た。

あきちゃんが知ったら、悲しむだらうなあ。

先生のことを好きだという彼女の思いを知ったその日に、本人よ
りも先にその思いが叶わないことを知ってしまったとは……。

ま、教師と生徒なんて現実的じゃないよな。

女子高生が担任教師に抱く恋心など、憧れに毛が生えた程度のも
のだらうと俺は思っている。

コーヒーを入れてくれた女教師は、ローテーブルを挟んで俺の向
かい側に座った。部屋でくつろいでいるからか、昼間ほどの威圧感
はない。

「あの、佐々倉先輩と……付き合ってるんですよね」

一応確認しておく。

「え、ええ……親戚の子には内緒ね。て言ってももうすぐバレちゃ
うんだけど」

少し照れたようにはにかんだ女教師は、年下好きな俺でもちよっ

と可愛いと思ってしまった。

「結婚するんですか？」

「うん」

あきちゃん、失恋確定。

「おめでとーございます」

「ありがとう……」

「……どうかしました？」

「えっ？」

「気がかりなことがあるんじゃないですか？ 佐々倉先輩、最近元気がいいんですね。それとなんか関係ありますか？」

「一か八か、カマをかけてみる。そろそろ先生が帰ってくるんじゃないかと気が気ではないが、問いかけはほどよく確信を突いたようだ。」

「そうねえ……元気ないというか、様子は変ね。生徒の話だと、黒板に時々、彰子って、書くらしいのよね。本人は何も話してくれないけど、ね」

女はそこで一度言葉を切った。黒板に女性の名前の件は、俺もあきちゃんから聞いて知っている。それが先生の魔法なのかどうかは、まだ分からないが。

「プロポーズの後くらいなのよね。おかしくなったの……本当は、結婚したくないのかしら」

笑い飛ばすように言った言葉は、妙に痛い。

「でも、結婚しなくなったらプロポーズなんてしなないと思いますけど」

「違うわよ……」

「え？」

「プロポーズしたのは、わ・た・し！」

「ええっ？」

「女からなんて、やっぱりするもんじゃないわねー」

サバサバと言ったのけた彼女は、横を向いてふっと息を吐いた。

そんな自分を諦めてるみたいに。

「や……あの、なんかすみません」

気まずい。逃げ帰りたい衝動をかるうじて押しとどめながら、俺はふとテーブルの上に眼鏡が転がっているのを見つけた。フレームのないタイプの。

「これ、佐々倉先輩のですか？」

不自然にならないようにそれを取り上げて、眺めてみるフリなんかしたりして。

彼女は頷いて肯定する。

好都合だ。

「先輩、目え悪かったんですね」

知らなかったなーなんて言いながら、自分の眼鏡を外して、先生のものに掛け替えた。

ぼんやりとした視界は、色を変える。

「外ではコンタクトなの。かけるのは家と休日だけよ」

答える彼女の顔が、先ほどよりも可愛く見えるのは先生の眼鏡というフィルターを通して見ているせいだと分かっているけど、少しだけドキドキして困った。

「……なるほどね」

人の眼鏡をかけると、俺はほんの少しだけ、その眼鏡の持ち主のことが見えてしまう。

先生の眼鏡で、見えたことは三つだ。

一つは、先生の魔法がどういう魔法なのかってこと。

「先輩に、伝えてあげてください。授業で赤チヨークは使わないほうがいいってことを。たぶん、それで悩みの一つは解決しますよ」

魔法使いには、魔法を使うための道具が必要になる。俺の場合は眼鏡。おジイの場合はパソコン。あきちゃんのは知らないけど、彼女には彼女の道具があるはずだ。

先生の場合は、赤色のチヨークだ。それを使って黒板に文字を書くとき、先生の魔法は発動する。

「どついう意味なの？」

「騙されたと思って、しばらく試してもらえば分かります」

分かったこと二つ目。先生の悩みはもう一つある。たぶんそっちが、先生が魔法使いになるきっかけだろう。

「先輩、結構言いたいこと言えない人でしょ」

俺は正直、先生のことなんてよく知らない。あきちゃんの恋するフィルターのかかった情報と窓から顔を見た程度で。だけど眼鏡をかけると分かった気になれるから本当に不思議だ。魔法ってそういうもんなんだろうけど。

「あなたに言いたいことがあるみたいですよ。ちゃんと聞いてあげてくださいね」

「言いたいことって、何？」

俺がそれを伝えるのはあまりにも無粋だろう。

「……何してんだ」

割り入った声は、掠れていた。

たぶん、困惑と怒りで。

まずい。

「先輩！ 待つてましたよー。でも俺、用事は済んだんでもう帰りますね」

眼鏡を外した俺は立ち上がり、玄関へと続く廊下に立ちすくんでいる先生へと大股に近づいた。

先生が何かを言う前に、その肩を軽く叩いて、

「男ならビシツと決めるよ、佐々倉先生」

先生だけに聞こえる声でハツパをかける。俺も案外お節介だな。

「じゃあね、彰子さん」

先生の眼鏡のおかげで名前を知ることができた女教師にだけ挨拶を残して。

不意をつかれた先生が我に返る前に、俺は逃げるようにしてその場を離れた。

もう一つ、3つ目の分かったことがあるのだが、それはもう俺の

手には余る問題だ。そこまで世話焼きにはなれない。

その後、二人がどんな会話を交わしたのか俺は知らない。

二人には二人の物語があつて、そこには俺は含まれない。今回はたまたま片足を突っ込んでしまったが、これ以上は野暮つてもんだらう。

俺の物語はまた別のところにあつて、それを続けるためには一つの問題をクリアしなければいけない。

さて、このことをなんて言つてあきちゃんに伝えよう。

セーラー服を脱がさないで(3)

吏一君は、嘘が下手。

喫茶またたびで向かい合わせに座って、私は吏一君から昨夜の報告を聞いた。

吏一君には、二つのことが分かったんだって。

一つ目は、先生の魔法のこと。

先生は、赤色のチョークを持つと、心の声が漏れてしまう。

だから、黒板に「彰子」って書きちゃったんだ。赤色のチョークを持っている時に「彰子」のことを考えていたから。

しばらく赤チョークを使わないようになって吏一君が先生に言ってくれたから、きつともう、大丈夫。魔法使いは、道具が手元になければ魔法を使えない。

二つ目は、先生には「彰子」という妹がいて、最近悪い男と付き合っているようなのでそれが心配だということ。心配だったから、授業中もつい妹の事を考えてしまったんだって。

「吏一君、それ、先生本人から聞いたの？」

「そうだよ」

「嘘つき」

吏一君が一瞬目を見開いて固まった。

どれが本当でどれが嘘なのかは分からない。だけど、全部が本当じゃないってことは私には分かっちゃった。女の感ってやつかな。なんてね。

吏一君は困ってた。たぶん、本当のことを言おうかどうか迷ってる。先生に口止めされたのか、私に知らせるべきじゃないことなのか。両方かもしれない。

「覚悟はしてるよ」

最初から、障害のある恋だから。実る可能性のほうがり低いつてこと、私はちゃんと知ってて好きになっただ。

だから、傷つく覚悟はちゃんとしてるんだよ。

眉間にしわを寄せた吏一君が考え込むように黙ってしまったので、私は待った。マスターの入れてくれたコーヒーを飲みながら。

ああ、苦いな。砂糖を入れたいな。

だけど、苦いのもおいしいって思うんだよ。私だって。

ストローで氷をかき混ぜて、カランカラン。良い音。

その音に目を覚ましたみたいに、やっと、吏一君が顔を上げる。

真っ直ぐにこちらを見つめる吏一君の涼やかな目は、夏がよく似合う気がした。

「あきちゃん、先生に告白しに行こう」

吏一君、何を言い出すの？

急に、夏ばてになつたような疲労感。まだ、倒れちゃいけないのに。今日でテストがやっと終わって、明日はクラスマッチなんだよ。

現実逃避する思考。だけど吏一君は逃げることを許してくれない。

「先生のこと好きなんだろ？ どうせもうすぐ夏休みだから、気まぐずい思いで授業受けなくても良いし」

「何それ。振られること、決まってるみたい」

「あれ、上手くいくって思ってたの？」

意地悪だ。

上手くいくなんて思ってない。思ってないけど、仮定と決定は違う。

「覚悟してるんじゃないの？」

吏一君は、意地悪だ。

私の覚悟が口先だけだったことを見抜いてる。

返す言葉が見つからなくて、誤魔化すようにしてストローを吸う。

ああ、もう。

我慢できずに、アイスコーヒーにガムシロップを二つ投入した。

やっぱり、苦い。

「あきちゃん。俺から聞くより、先生から直接聞いたほうがいいんじゃないの」

でろでろに甘くなったコーヒーに、ちょっとだけ口をつける。
私はまだ迷っていた。

「今夜、先生んちに行こう」

「え!？」

突然すぎるよ吏一君。

「時間がないんだ」

だけどその声が真剣で、やさしかったから、私は嫌とは言えなかった。言う隙がなかった。

考える時間はまだあるから、と夜にまた会うことを約束して、吏一君はバイトに行ってしまったのだ。

「どうしよう……ねえ、おジイ」

くるりと振り向けばいつものデスクトップ席におジイが一人、画面と睨めっこをしている。

「心配せんでも、あきちゃん可愛い。自信を持てばいいんじゃないよ」

「そういう問題じゃないと思うんだけどな」

可愛いは否定せずありがたいがたく受け取るけど。

「そういう問題じゃよ。自分に自信を持って当たって砕けてくれればええ」

「おジイまで!」

失恋することを最初からわかっただけで伝える思いに、意味なんてあるのかしら。

「それって自己満足なんじゃないの?」

「それはわからんよ。自己満足でしたことが誰かのためになることもある。逆も然りじゃ」

「先生次第ってこと?」

おジイは軽く頷いた。

「わしは吏一がわざわざ告白してみると言うことには何か意味があ

ると思つとるよ。あれはあまり人にどうこうせいとは言わん子じゃ」
吏一君の目を思い出す。先生とは違う。くつきりとした涼しげな
二重。

先生の目はどちらかというところぼやっとして重たげだ。だけど笑つ
た顔がすごくやさしくて、大好き。

「私、先生に好きつて……伝えたいのかな」
見ているだけで十分で。ただ、苦しんでいる先生のことを助けた
かつただけで。

「あきちゃんの好きにしたらいんじゃないよ」

それがわからないから困つてるんだよ、おジイ。

吏一君は考える時間をくれた。吏一君のバイトは八時まで。まだ
十分に時間はある。

教科書とノートを広げて明日の英語のテスト勉強を始めてみたけ
れど、こんな状態で集中できるはずがなかった。考えなくちゃ。

私が先生と出会つたのは、入学式の日だった。

一目惚れだつたんだ。

入学式が終わつて、みんなが教室でホームルームが始まるのを待
っているときに、私はなぜか一人、教室に戻れなくなっていた。恥
ずかしい話なんだけど、迷子になつちゃつて。

先生を廊下で見つけたのは本当に運が良かった。

「あのっ教室、教室つてどこですか？」

私は半ばパニックになつていて、自分が何年何組かもまともに伝
えられない。なのに、先生は私を安心させるように、にっこり笑つ
て、

「俺も今から行くところだから、ついておいで」

「え、え？」

先生が私の担任だつても、すでにクラスの生徒全員の顔と名
前を覚えているつても、私は教室に無事に戻つて席に着けてか

らやつと、理解した。

その後も、先生はいつもやさしくて、笑顔が素敵で、ちよつとだけ頼りない時もあるけど、毎日顔を見るたびに、先生に惹かれていく自分がいた。好きだなあって自覚するのに、そんなに時間はかからなかったよ。

「考えてもわからんことはたくさんあるんじゃないよ」

おジイの言葉はいつも正しい。

結局、英語の長文問題を解き終えても、先生に告白するべきか、答えは得られなかった。

バイトを終えた吏一君が戻ってきてても、まだ。決まらない。決められない。

私の気持ちは、その程度だったってことなのかな。

「吏一君は、どうして私が先生に告白したほうがいいって思うの？」

「あきちゃんに後悔してほしくないから」

「逆に、告白して、後悔しちゃったら……？」

私が後悔するかどうかなんて、吏一君に分かるのかしら。そんな、ちよつとした反抗心みたいなものも混じっていた。

「それって、先生が酷い振り方した時だろ？ あの先生があきちゃんを傷つけるような振り方すると思うの？」

吏一君がちよつと怒ったような顔で言う。

困ったな。吏一君の言うとおりなんだもの。先生が、酷いことなんて言うはずがない。告白したことを後悔させるような振り方をするはずがない。

「吏一君のほうが先生のことよくわかってるみたい」

吏一君は不本意そうな顔をしたけど、私はちよつとだけ悔しい。

「でも、私、振られるんだよ……」

最初から諦めているはずなのに、振られるのは怖いなんておかしい話だ。だけど躊躇ってしまう。わざわざ自分で崖に突っ込んでい

くよつな勇氣は私にはない。

「あきちゃん。振られる機会もないまま諦める恋の方が、苦しいんだよ」

「え……？」

吏一君の言葉の意味を掴みかねて、

「好きつて事を伝えられないから、振られる事もできない。振られてないから、諦めたくても諦めきれない。がんじがらめになるよ」

「それつて……」

真つ直ぐに私を見る吏一君の目は怖いくらいに真剣で。

聞けなかった。

それつて、吏一君自身の話なの？

「ごめん。変なこと言った」

表情を緩めた吏一君が視線を外す。

「後悔、するかな」

「わからない。俺は、あきちゃんには後悔をしてほしくない。だけど強制はできないから、あきちゃんは今の自分の気持ちに正直に従つたらいいと思う」

自分の気持ち。

気がついたら、セーラー服の裾をぎゅっと掴んでいた。

「私ね、先生のこと見てただけなんだよ。本当に。遠くから。それで、満足してたんだよ」

話しながら、もうそれが過去形になっていることに私は気付いていた。

「でも、先生が魔法使いかもしれないつて思つて……」

急に、距離が近くなった気がした。もっと近づけるかもしれないと、期待してしまった。

生徒と先生ではなく、魔法使いと魔法使いののだと、同じ存在なのだ。

本当は、先生の事を心配していたわけじゃなくつて、好きな人と
の共通点を見つけて単純に喜んでいただけなのかもしれない。

でもね、苦しんでいる先生を見てられなくって、助けてあげたいって思ったのも、本当なんだよ。

好きな人、だから。

「私、先生には笑っていてほしいな」

「こんな可愛い子に好きって言われて、喜ばない男はいないよ」

「本当？ 困らないかな、先生」

「困るのはモテる奴の特権だな。あきちゃんがどれだけ先生のが好きで、どれだけ先生がいい男か教えてやればいい。そうすれば、先生はしばらくあきちゃんの事が忘れられなくなる」

「しばらく、なんだね」

「残念だけど」

吏一君は正直だ。

一つも期待を抱かせないまま、私の背中を押すんだ。

「あきちゃんのことをずっと考えてくれる男が欲しかったら、まずは先生への恋を終わらせないと」

おどけた調子で付け足された言葉は、振られる私には何の慰めにもならない。

でも、決めたよ。

後悔しないほうを、選んでみようかなって。

一瞬でもいい。先生の頭のなかを、「彰子」じゃなくて「あきちゃん」でいっぱいにしてやれたら、それもいいかなって。

「お願い、吏一君。私を先生のところ連れて行って？」

おジイやマスターに見送られて、私は再び吏一君の車に乗り込んだ。

さあ、ここからクライマックス。私のどきどき告白タイム。どうか上手くいきますように、祈ってくれたら嬉しいな。

セーラー服を脱がさないで(4)

平日の夕方、町の片隅にある小さなカフェバー『ムーン&リバー』を訪れる客はまばらだ。真新しい椅子に腰かける客から見えない位置で、店長とバイトがお喋りに興じる暇が十分にある程度に。

現時点での客入りの程度でいえば、喫茶またびにさえ負けている。夜の時間帯は多少増えるとはいえ、経営が心配になってくる。

当の店長はというと、呑気に自分で入れたコーヒーを啜っている。俺の話を聞いているのかいないのか、曖昧な相槌を打ちながら。

で、話を聞き終わっての最初の一言が、

「ロリコンだな」

客が少なくて本当に良かった、と思った。事実ではないにしても、いらん誤解をしてもらっては困る。

「どこがロリコンだよ」

「だって、高校生だろ？ お前、今いくつだっけ？」

「二十一。余裕だろ」

「六つ差か。際どいな。考えてみるよ、お前が高校生の時、その子はまだ小学生だぜ？ ロリコンだろう」

「そりゃその年齢で考えるとそうだけど、俺は今もう二十一なわけだ、あの子も高校生だし、つか、過去を見るな。未来を見る！俺が三十の時にはあの子は二十四だぜ？ いいじゃん。大体、あきぢゃんの好きな先生なんか二十五歳だ」

「あー、あの年頃の子って年上好きだよな。若い先生とか一番手っ取り早いんだらうね」

「だろ？」

「でもな、俺は問いたい」

急に、店長は改まって俺に顔を向けた。雇われ店長 かわぎしこうすけ 川岸幸助は、童顔だ。そりゃもう、スーツを着ていても高校生と間違えられくらいに。実年齢は俺よりも、佐々倉先生よりもさらに上のはず

だ。前に聞いたけど忘れた。男の年齢になど興味はない。

で、その童顔が真面目くさった顔で言うのだ。

「お前、その子のこと好きなくせになんでわざわざ告白すすめるわけ？ どうせ先生は結婚しちまうんだろ？ 待ってりゃいいじゃん。もし、まかり間違つて先生が女子高生にクラつとしちまったらどうすんの？」

「先生は揺らがねーよ」

「婚約者、美人だった？」

「いや、まったく俺の好みじゃねーけど、先生は相当惚れてた」

なんで分かるかって？ 先生の眼鏡で見たからだ。先生のフィルターを通して見る彰子さんはびっくりするほど綺麗だった。

もちろんそんな説明を川岸にはしない。彼に話して聞かせたのは、あくまでも当たり障りのない部分だけだ。

「お前はロリコンだからな。大人の女の良さは分かるまい」

「自分こそ高校生みたいな顔しやがって」

「知らないだろ。俺の顔は年上受けいいんだぜ？」

勝ち誇った顔を向ける川岸を無視して、俺は店内の時計を見上げた。時間が早く過ぎればいい。バイトが終わつたらすぐにまたたびに行つて、あきちゃんと一緒に先生の家に行く。彰子さんがいなければいいのだが。

あきちゃんと彼女を会わせてしまうのは、まずい。彼女はあきちゃんの学校の先生だし、一応口止めもされている。何より、あきちゃんのシヨックを考えると、鉢合わせは避けるべきだ。知っていることと目の当たりにすることは違う。

「ま、成功することを祈ってるよ」

「おう。……いや、成功したらダメなんだけどな」

「違う。お前が、失恋した女子高生が弱つてるところに付け込んで上手くモノにできることを祈ってる」

「……」

そんなつもりはない、と言ったら嘘になる。だけど、決してそん

な邪な気持ちだけじゃないんだ。

あきちゃんのため。それだけじゃない。あの先生にもきつと、あきちゃんの告白は力になる。先生の赤チヨークの魔法をセーブする鍵にもなるかもしれない。

その辺りの事は、先生の眼鏡をかけた自分だから分かることだ。魔法で得た感覚を、川岸にうまく説明できる気がしない。

だから、いいさいいさ。俺のためにも、あきちゃんの恋を終わらせることが必要なのは、間違いじゃない。

そうは言ってもなかなか上手くいかないのが現実だ。

結論から先に言えば、俺の恋は始まらなかった。

バイトをさつさと上がって、またたびにあきちゃんを迎えに行つた俺は強引に彼女を説得して車に乗せ、先生の家へ。時刻は八時半を回っていた。

事件はそこで起こった。いや、起こっていたと言うべきか。

先生のアパートに着いた俺とあきちゃんが目撃したのは、黒服の厳つい顔をした男どもに両脇を固められ、強制的に路地裏へと連れ込まれる先生の姿で。

「なんだあれ……」

「吏一、くん。今の、先生だよね……?」

助手席に座っているあきちゃんの顔は可愛そうなくらいに真っ青だ。

先生は眼鏡をかけていた。ということは、家に居たところを連れ出されたのか。彰子さんは大丈夫だろうか。

車から降りて先生の様子を見に行くべきか、迷った。情けないことに。

会話だけでも聞こえないかと運転手側の窓を少しだけ開けてみる。響いてきたのは男の怒号。先生の声ではない。脅すような声音に、

不穏な空気を感じとる。分かってはいたが、どう考えても友好的な関係ではない。

窓を開けたのは、完全に俺の失敗だ。

「あきちゃん！」

居てもたつても居られなくなったのか、ドアを開けて飛び出したあきちゃんを俺は止められなかった。俺も後を追う。ちくしょう、相変わらず足はえーな。

先生が連れ込まれた細い路地に、あきちゃんは迷わず飛び込んでいく。

「危ないから、待ってっ！」

俺の制止の声なんか、あきちゃんはちつとも聞こえてないようだった。あきちゃんの向こう側、胸倉を捕まれている先生の姿が見える。

鈍く、嫌な音がした。黒服の一人、背の高いスキンヘッドの男が、先生を殴ったのだ。

眼鏡が吹っ飛ぶのが見えた。

「先生っ！」

あきちゃんの悲鳴みたいな高い声が、響いて。

黒服がこちらを見た。なのに、あきちゃんは怯むことなく突っ込んで行く。

スピードを緩めるどころか加速して、男たちの数メートル手前で、飛ぶ。

翻るセーラー服のスカート。

真っ直ぐに伸びた細くて綺麗な足。

男の顔面にめり込む、茶色のローファー。

かるやかな飛び蹴りが、目の前で炸裂する。

これは現実なのだろうか。

あきちゃんが飛んで、黒服の男を一人、蹴り倒してしまった。

セーラー服の可愛い女の子が、だ。

頼む、誰か夢だと言ってくれ。

倒されたスキンヘッドは意識こそあったが呆然としていた。背の低いもう一人の男も、だ。

殴られた左頬を少しはらした先生も。

そして、こうして状況説明をしている俺も、正直なところ何がなんだか分からない。

「先生に酷いことしないでよ！」

呆然としてばかりの男どもの意識を引き戻したのは、あきちゃん
の力強い声だった。

眼鏡をかけなければ。

なんでか分からないが、そうしないといけない気がした。たぶん、見なければいけないものがある。

「関係ねえガキは引っ込んでろ！」

男たちもさすがに女子高生相手にやられっぱなしはまずいと思っ
たのだろう。立ち上がったスキンヘッドがあきちゃんに凄む。

胸ポケットから取り出した眼鏡をかけた俺は、あきちゃんの背に、
青い炎を見た。

やばい。これは、目がやられる。

焼けるような痛みを目の奥に感じて、たまらず眼鏡を外す。なん
だ、今のは。

「関係なくなんかないわ！ だって、だって私は……」

あきちゃんは急に勢いをなくしてしまう。そりゃそうだよな。な
んで見知らぬおじさん経由で先生に告白せにやならんだ。そんな
のは可哀想だ。かと言って今の状況を俺がどうこうできるかとい
うとちょっと難しい。情けねえな。

俺がただ突っ立っている間に、スキンヘッドがあきちゃんに近寄
る。薄ら寒い笑みを浮かべて。

「ああ、そうか。分かったぞ。お嬢ちゃんは先生の生徒か。先生、
まずいなあ。ダメだろ、教え子に手え出しちゃあ」

「え？」

これぞ悪党のテンプレみたいな奴だな。

「何言い出すんだ。関係ない子を巻き込むのはやめてくれ」

「関係なくないってこの子は言ってたぜ？　なあ、先生」

ああ、こりゃヤバいかな。

俺は胸ポケットから眼鏡を取り出して掛ける。

あきちゃんの周りだけ、空気が青い。しかし今の彼女のその色は酷く不安定だ。薄くなったり緑がかつたり。その色の不安定さは、そのまま彼女の魔法が不安定になっていることを意味する。

「……やめてよ！　先生は、私なんて相手にしてないんだから！　自分が傷つく言葉をあきちゃんは自ら口にして、泣きそうな顔をしていた。」

「だから、先生なんか、だいつきら、い」

とどめを刺す。自分の心に。

すっかり気迫の消えたあきちゃんの手首を、男が掴んだ。

あ、こら。あきちゃんに触ってんじゃねえ。

俺が動こうとしたときだ。

タイミングの悪いことに、思わぬ台詞が飛び込んできたのだ。

「何やってんのよ兄貴！」

聞き覚えのある強い口調。

路地の反対側の入り口から現れた彼女を見て、俺は大体のことを理解した。

俺が、先生の眼鏡を掛けたときに分かったこと3つ目。

先生は悩んでいた。

自分からはちゃんと彼女にプロポーズをしていないことと、彼女の兄に結婚を反対されていることを。

つまり、このあきちゃんに見事な蹴りを入れられたスキンヘッドの男が、彰子さんの兄貴というわけだ。顔をよく見れば似ていないも……いや、似てない。

「なんてことしてるの！　結婚に反対するのは勝手だけど、この人を傷つけたら許さないわよ」

凄みは彰子さんの方が格段上だった。女の啖呵ってなんでこんな

に怖いんだろうな。

「こんな男、お前にプロポーズもしてないっていうじゃないか」

「されたわよ！ ちよつと遅かったけど、でも、ちゃんとしてくれたわ」

答える彼女は心なしに嬉しそうだ。

先生、ちゃんと食べたんだな。やるじゃん。

ここで先生がもう一步、前に出た。

あきちゃんと、スキンヘッドとの間に入るようにして。

「お義兄さんには、ちゃんと認めてもらえるように頑張りますから、だから、今日のところは……」

黙って頭を下げる。

少し、腰は引けていたが、それでも言葉には有無を言わさない強さがあった。

先生が顔を上げる。スキンヘッドはまだ渋い顔をしている。

「それに、この子は私の生徒です。生徒を傷つけるような真似は、教師として見過ごすことができません」

今度はしっかりと相手の目を見たまま、先生が告げる。教師の顔で。

そう言った方が、スキンヘッドの男も身を引きやすい、と先生がそこまで考えたのかは分からないが、義弟の言葉を大人しく聞くよりは生徒を守る教師の言う事の方が良かったのだ。結果的に。

「そういうことなら、分かった。……お嬢ちゃん、悪かったな」

スキンヘッドは、あきちゃんにだけ謝罪する。

しかし、あきちゃんには男の声など聞こえていない。焦点の定まらない目で、のんやりとスキンヘッドを認識して、微かに頷いたようだった。

多分、今の状況がまだ飲み込めていないのだろう。

こんなことになるなら、ちゃんと先に話せば良かったな。

先生には、婚約者がいるんだってことを。相手のことは口止めされた手前、言えなかったのだが、結果的にはこうしてバレてしまっ

たわけだし。

「ほら、行くわよ。兄貴。佐々倉先生は、その子をお願いしま
すね」

彰子さんが先生に向けたのは、そんな他人行儀な台詞。

先生は一瞬戸惑った様子を見せたが、すぐにハイと返事をした。

あきちゃんは、いまいち焦点の定まらない目でゆっくりと先生の
顔を見上げる。

やがて、決意したようにきゅっと唇を結んだ。

さて、多分もう気づいている人も多いと思うけど、俺は今、完全
に蚊帳の外である。ああそうさ。一ミリたりとも噛んでない。

俺がこの話を続ける必要はまったくもってないわけだ。

これはあきちゃんの失恋の物語だからな。俺の出番はその後。も
う少しの我慢だ。

セーラー服を脱がさないで(5)

初めて好きになった人は、近所に住むお兄ちゃんだった。毎日好ききつて言ってたんだけど、お兄ちゃんは引越していなくなっちゃった。

小学校の時に好きになった子にはバレンタインにチョコを渡したけど、何も言えなかった。

中学生。メアドを交換できただけで嬉しかった。他愛のないメールのやりとりで精一杯。

生まれて初めてだよ。

本当の告白は。

「佐々倉先生」

先生を呼ぶ。

「はい」

真っ直ぐに私を見て、返事をしてくれる。

急に、怖くなった。

もう、私の気持ちなんて、全部バレてるのにね。結末まで全部、決まってるのにね。

でも怖いんだよ。何が怖いのかうまく説明できないけど、でもたぶん、それは私だからだ。ほかの女の子なら、きつとこんな気持ちにはならない。私が、魔法使いじゃなかったら、きつと。

「先生は、たぶん、私の事なんか知らないと思います」

だから最初に、予防線を引く。

さつき、先生は私の事を自分の生徒だと言ってくれた。見知らぬ私の事を。

逃げ道を用意したらちよつとだけ、冷静になれたんだと思う。覚悟が決まったから。

そのとき、初めて気づいたんだ。

いつの間にか、雨が降り出している。

良かった。これなら、泣いてもバレないや。

「私は、先生のこと……ずっと、ずっと見てました。遅くまで授業の準備してる事も知ってるし、ホームルームでちゃんと一人一人の顔を見て話してくれる事も知ってます。入学式前から、クラスメイト全員の名前と顔を覚えてくれてることも……。先生が、ちゃんと見てくれること、私は知っています。私は、そういう先生が、大好きなんです」

声が震える。

鼻の奥がちよっとだけ、つんとする。

先生。

顔を上げればすぐそこにある先生の目。少しだけ群青色をした、大好きな先生の目が私を見てくれている。今だけは、私のことだけを。それなのに、私はその目をまともに見ることができなくて、代わりに、先生の唇を見ていた。そこから紡がれるだろう言葉に怯えながら。

雨に濡れて寒そうな青い唇は少しだけ震えていた。だけど、私の言葉を聞くうちに、少しずつ赤みを取り戻していった。だけど、私の

あ、ちゃんと伝わったんだなって分かった。私の気持ち。

「ありがとう。うれしいよ」

困ってしまうんじゃないかな。そう思ったのに、先生はこれでもかってくらい笑顔で、応えてくれて。もう、十分です。

でも、ごめん。って、後に続く言葉を私はちゃんと知っているから。

「先生、これからも、私の先生でいてください」

顔を上げることなんて、もうできなかった。

嘘だよ。本当は、私だけの先生になつてほしい。

「もちろん。俺はずっと、ずっとみんなの先生でいるよ」

先生の声はやさしくて、とろけてしまいそうで、だけど、私だけ

の先生じゃないんだなあ。

そう思ったら、今さらみたいに悲しくなつて。

とつくに知つてたのに。最初から、失恋するって決まつてたのに。いつの間にか、気持ち伝えるだけじゃ満足できなくなつてたんだ。これ以上悲しくなる前に、私は先生に頭を下げて、吏一君のところに逃げるようにして走つた。どん、つてぶつかるようにして足を止めた私を吏一君はちゃんと受け止めてくれて。

「もついいの？」

やさしい吏一君の言葉に頷いた。

その後のことは、よく覚えていない。

たぶん、吏一くんが送つてくれたんだらうけど。泣きじゃくつてる私はとても面倒くさかつただらうな。

今度、ごめんとありがとうを言わないと。

家に帰つて濡れたセーラー服を脱ぐと、どつと疲れが押し押せてきた。

家族と顔を合わせるのが嫌で、シャワーも浴びずにベッドに潜り込む。

寝る直前に、三島先生のことを思い出した。

三島彰子。隣のクラスの担任で、英語の先生。

不思議なことに、三島先生を羨ましいとか憎いとかは一切思えなかった。そもそも私は、三島先生と戦つてさえないのだ。

戦おうと思えば、できたのかな。違う。争える位置にすらない。そつか、佐々倉先生と三島先生は結婚するんだな。

それは遠い遠い世界の出来事のように、私のなかに上手く収まってくれない。収まりきれなかつた分は目尻から溢れて涙になる。泣いて、泣いて、いつの間にか泣き疲れて眠つてしまった。

翌朝の私の顔は酷いことになっていた。

それでも私は、今日も制服を着て学校に行かないといけない。泣きはらした目を長い前髪で隠すようにして、うつむいて、できるだけ人に顔を見られないようにして。

当たり前だけど、先生は何も変わっていないかった。殴られた頬は少しだけ腫れていたけど、出席を取る声はいつもどおり優しい。私の名前を呼ぶときも。

返事をする私の声は、震えてはいなかっただろうか。

「宮司みやじ」

ホームルームが終わって、先生が私を呼んだ。心臓が飛び出るかと思った。な、なんで？

「大丈夫か？ 声枯れてたけど、風邪か？」

あ、いつもの先生だ。

やさしくて、生徒のことちゃんと見てて、目立たない私のことだつて、ちゃんと。

泣いたからだ、なんて言えるはずもなく、私は頷いてそういうことにする。

「昨日雨だったからな、外で濡れたか？」

先生だって、濡れたじゃない。

「しんどくなったら保健室行けよ？」

「……はい」

私のかすれた声を、先生はちゃんと拾ってくれる。

先生、やっぱり好きです。

この笑顔が、私だけに向けられるものじゃないと知っていても、少しくらい、私の事を考えてくれましたか？

一瞬でも、三島先生の事を忘れてしまいうくらい。

「せんせーい、女子着替えますよー。クラスマッチ始まっちゃー」
「あ、そうか。悪い。宮司も出よう。女子に怒られるぞ」

先生の笑顔を独り占めする暇もなく、私は体操服の入った袋を掴んで廊下に飛び出した。

隣のクラスに移動して、体操服に着替えるためにシャツと学ランのズボンを脱ぐ。

真っ白い体には筋肉なんかなくて、そこらの女の子よりよっぽど細くて、だからみんな気づかない。

セーラー服を着た私が、男だつてことには。

「彰彦。先生に何言われてたんだ？」

「風邪ひいてんのかつて……」

「ひいてんの？」

「ひいてるつて言つたらクラスマッチ休めるかな。サッカー嫌い」

「おいおい、人数ギリギリなんだから出るよ。そりゃ彰彦の運動オンチはひでーけど」

否定はしない。彼らの言うとおり、クラスメートの前で私はただの鈍くさい男子高校生。

その実、セーラー服を着たときだけ最強になれる魔法使いだなんて、誰が思う？

そんなことは知らなくていい。魔法使いは、自分の力を隠しておくものだ。

セーラー服を着て体育に出てもいいなら、いくらでもシユートを決めるんだけど。

そんな台詞を飲み込んで、体操服に袖を通した。

私の恋の物語は、これでおしまい。

上手くいかないことは最初から分かってた。たまたま、先生の書いた名前の「彰」って文字が私の名前と一緒にだったから、たったそれだけのことに、ほんの少し夢を見ていたんだ。

私が本当に「あきちゃん」だったら良かったのかな。

それでも先生にはもう、別の「彰ちゃん」が居たから、結果は一緒だったのかもしれない。

先生はあれから、黒板に名前を書かなくなった。正確には、赤チヨークを使わなくなった。

赤チヨークをどうしても使わなきゃいけない時でも、自分の魔法の力に振り回されることがなくなった。コントロールは、自覚することである程度できるようになる。

吏一君のおかげだね。

そうそう、吏一君にはまだ、私が本当は男の子だってこと言っていないんだ。

言わなきゃいけないかな、やつぱり。

吏一君は、怒るかな。軽蔑するかな。

拒否されるのは怖いし、失恋したばかりの私には、ちょっとだけしんどい。

告白したことを後悔はしてないよ。

吏一君の言うとおりだった。

告白して良かった、とはまだ思えないけど、いつかは 例えば次に私の物語が始まる頃には、そんな風に思えるようになってたらいいな。

だから、あともう少しだけ、お願い。セーラー服を脱がさないで、「魔法使いのあきちゃん」で居させてほしいの。

セーラー服を脱がさないで(6)

相変わらず客のいないカフェバー「ムーン&リバー」のカウンターの内側で、コップをひたすら綺麗に磨くだけの単純作業に飽きてきた頃だった。

彼女が、やって来たのは。

「見つけた。にいぬまりいち新沼吏一君」

聞き覚えのある声で名前を呼ばれて、反射的に顔を上げる。入り口に立つ女が、きりつとした強い目で、俺を真っ直ぐに見つめていた。

え、なんで。

驚く俺を余所に、彼女は強めの口調で続ける。

「吏一君は、魔法使いでしょう?」

閑古鳥の鳴いている店で良かったと心底思った。タイミングの良いことに、川岸も買い出しに出かけている。

「そんな突然、意味不明なこと言われても……どうしたんですか、彰子さん」

あきちゃんの失恋相手である佐々倉先生の婚約者　あの日、あきちゃんに告白の機会を与えてくれた女教師。その凛とした面差しを見返して名前を呼んだ。

すでに少々気圧され気味なのは仕方がない。だって、年上の女はいつだってしたたかで、恐ろしい。

「心配しなくてもいいわよ。私も月並町の人間だもの。魔法使いのことは知ってるわ。佐々倉もそうだとは全然知らなかったけど」

彰子さんは何の躊躇いもなく「魔法使い」という言葉を使う。そうか、彼女も。

俺は眼鏡を掛けるべきか迷った。が、すぐにそんな必要はないこ

とに気づく。学校に行った時と、先生の部屋に行った時。もう二度も、俺は彼女を眼鏡のレンズ越しに見ているんだから。魔法使いだったなら、その時に気付いているはずだ。

「彰子さんの『家』は、そういう『家』なんですか？」

ここで言う家は、普通の家とは大分ニュアンスが違う。月並町の旧家の中には、いくつか魔法使いを排出しやすい家柄というやつがあるらしい。

「うちは分家だから、最近は少ないけどね。今生きている中だと祖母と兄くらいだし」

「あ、あのスキンヘッドも魔法使いなのか。」

「ちなみにどんな……？」

「それは秘密。あまり言うなって言われてるから」

さすがは魔法使いの家だ。その辺りの教育はしっかりしている。

「ねえ、座ってもいいかしら」

俺の目の前のカウンター席を示す彰子さんの申し出など断れるはずがない。注文までされてしまっってはなおさらだ。

大事なお客様にアイスカフェオレをお出しし、店の中で二人つきり、改めて相對する。

「内緒話をするには良い店ね」

「客がないってのはつきり言ってくれていいんですよ」

改めて店内を見渡しても、彰子さんの視界の中に入るのはバイトの俺一人だけ。

「こんなお店あるの、知らなかったな。いつできたの？」

「五月くらいに……って、そういえばなんで俺の名前とこの場所！」

そつだ。魔法使いを知っていたことはともかく、彼女と俺のつながりなど佐々倉先生とあきちゃんを通したものでしかなくて。

「吏一君。昔、結構悪いことしてたでしょ」

ピシリ、指摘する声に容赦がないのは彼女が教師だからだろう。

どうしてそれを、と尋ねる前に彼女は教えてくれる。

「あの時、兄と一緒にいた、兄の腰巾着みたいなのがね。ちょっと

小柄の。浅井君って言って、やっぱり昔ヤンチャしてた子で……彼が君のこと知ってたの」

「浅井？ 浅井……リヨウさん？」

ほんと頭の隅に浮かんだのは、それなりに世話になっていた兄貴分の顔で。

なんてこった。世間は狭いと言うけれど、月並町の中はもっと狭い。

「浅井君に君を探してもらったのはね、一言お礼を言いたくて」

椅子に座った彰子さんが顔をしっかりと上げて俺を見つめる。あれ、座っただけなのにな。視線の高さが明らかに違うからだろうか。威圧感がなくなっている。女つてのは本当によく分からない。

「佐々倉の悩みは解決したみたいだし、プロポーズしてもらえたし……兄貴はもう少し時間がかかりそうだけど」

「あれって、いわゆるシスコン……？」

「正しく、そうよ」

彰子さんは心底面倒くさそうに答えた。ため息が重い。

妹の婚約者を脅すような兄貴だ。これまでの彰子さんの苦労と、これから先の佐々倉先生の受難は眼鏡をかけなくとも想像できる。

「頑張ってください」

「ええ。本当に、色々ありがとうございます」

礼を言うときりしたのか、彼女はようやくストローに口を付けた。

べつに、礼を言われるようなことはしていない。俺はただジイさんとあきちゃんに頼まれただけで、最終的にはあきちゃんの失恋の手伝いをしただけだ。

彰子さんのカフェオレが見る見るうちに減っていく。その勢いが、不意に止まった。

「ん、でもあなた、佐々倉の後輩ってというのは嘘だったんでしょ？ どうして助けてくれたの？」

「あーそれはですね」

話せば長くなる。さて、どこからどこまで話すべきだろう。嘘は得意ではないし、ついてもバレそうな気がする。

結局、あきちゃんが大好きな先生の挙動がおかしいのを心配していて、俺は彼女に惚れていたから協力した、という、大分端折ってはいるが嘘偽りのない事実を話した。

彰子さんは特に疑うわけでもなく聞いてくれたが、残り少なくなったらカフェオレをずっと吸って、首を傾げる。

「変ねえ。あの、あきちゃんって子、やっぱり私一度も見たことがないのよ。しかも佐々倉のクラスの生徒でしょう？ 私も英語の担当持つてるから顔を見たら絶対に分かるはずなのに」

「え……？」

「フルネームは？」

「……知らない」

そうだ。俺はあきちゃんのことを何も知らない。最初に名前を聞いた時、彼女は「あきちゃん」としか名乗らなかった。学校で彰子さんに見つかったときも彼女は、一目散に逃げる道を選んだ。

それはつまり、本当は、あの学校の生徒ではなかったから？ 調べられたらバレてしまうと分かっていたから？

だけど、あきちゃんはいつもあの学校のセーラー服を着ていた。だから俺は、あきちゃんが先生の生徒だということを全く疑わなくて。

ぐるぐると思考する。頭を使うのは苦手なんだ。

考えたって答えが出てくるとも思えなくて、困った時のスマートフォンを取り出した。あきちゃんの番号……それすらも知らないなんて、鈍くさすぎるだろう俺。

「そうだ、ジイさんだ」

時刻はまだ四時を回ったばかり。今ならジイさんはまたたびにいる。あのデスクトップパソコンの前に。案の定、スカイプでコールするとすぐに応答した。

『なんじゃらほい』

俺の焦りを知ってか知らずか、ジイさんの脳天気な声が聞こえてくる。

「ジイさん、あきちゃんそこにいるか？」

『おらんよ。夏休み中はずっと親戚の家でバイトしてる』

「マジかよ。どこで？　つか、あきちゃんの連絡先教えてくれ！」

『吏……あまりがつつくと嫌われるぞ』

「放っとけ！　だってあの子、何者だよ。名前は？　本当の学校は？　魔法だって、今まで見たことない力だったぜ」

彼女の背負った、眩むような強烈な青。それはそのまま、彼女の魔法の強さを表している。ああ、そうか。あきちゃんの色が強すぎて、あの時、彰子の兄の魔法はちっとも見えなかったのか。

まあそんなこと、今はどうでもいい。

彼女は一体、何者なんだ。

『あきちゃんは、魔法使いじゃよ』

「だからっ」

『あの子は、魔法使いでいる間が、セーラー服を着ている間だけが、唯一本当の自分で居られる時間なんじゃよ。お前にそれを邪魔する権利があるか？』

「なんだよ、それ」

『大丈夫じゃ。時が来ればあきちゃんはきちんと話してくれるじゃろう。そういう子じゃよ、あの子は』

カランカラン、と氷をかき混ぜる音がした。彰子さんが訝しげにこちらを見ている。

「ジイさん、俺から聞いたらあきちゃんは困るかな」

『そうじゃな……くれぐれも早まったことをするんじゃないぞ、吏一。何事もタイミングが大事じゃ。特に恋愛事はな』

「んなもんジイさんに言われなくても分かってたんだよ！」

スカイプの通話を終了する。

カフェオレを飲み終えた彰子さんが、くすくすと笑っていた。

結局、俺が主役に躍り出る物語はもう少し先の話になりそうだ。魔法使いあきちゃん。彼女が何者であっても、俺が彼女に惚れる事実は変わらない。

俺は待つよ。ジイさんの言うタイミングとやらが来る瞬間を。

できればなるべく早くその時が来ればいい。

彼女がセーラー服を脱ぎ捨てて、魔法使いじゃなくなったとしても、大丈夫だと思える日が、早く来ればいい。

俺とあきちゃんの話は、今回はこれで本当に終わりだ。

魔法使いの話はまだまだ続くんだが、俺は魔法使いである前に勤勉な大学生で、高校生が夏休みに突入した今、前期のテストが間近に迫っている。

正直、魔法使いのごたごたに首を突っ込んでいる暇がない。

そう、ごたごただ。

佐々倉先生みたいに持つていても何の役にも立ちそうにない魔法もあれば、存在そのものが犯罪になりそうな、とんでもない魔法を使える奴もいる。

俺はまだ気づいていない。

俺がテストに苦しんでいる間に、それは少しずつ始まっていた。やがて巻き込まれていく、月並町の魔法使いを巡る物語。

だけどそれはもう少し後の、目と鼻の先の、また、別の話だ。

セーラー服を脱がさないで(6) (後書き)

月並町シリーズの第一話「セーラー服を脱がさないで」は一応ここで終わりです。

ここまでお付き合いいただきまして、ありがとうございます。

次の話にいつ入れるのか分かりませんが、少し充電期間を置いて、あきちゃんや吏一はもちろん、ほかの魔法使いたちのことも書いていけたらいいなあと思っています。

ジャンルに分ければ現代ファンタジーなんでしょうけど、どっちかというと、描きたい部分は今回で言えばあきちゃんの恋愛と吏一の片思いがメインで、不思議な力を持っていることは実はそんなに重要じゃないのかな、という気がします。

いや、登場人物にとっては大変なことなんでしょうけど。たまたま魔法が使えた。ただそれだけのことで。根本的には普通の人と何にも変わらないのよ、と。セーラー服着たりしてますけど。

ま、のんびりやっていきます。

では、また次の物語でお会いできたら幸い。

晴れた日に傘を（前書き）

「月並町の魔法使い」番外編
（注）あきちゃんや吏一は出てきません。

晴れた日に傘を

時は放課後、場所は教室。

窓から射し込む夕日も、遠くでカラスの鳴く声も、グラウンドから聞こえてくるかけ声も、すべてが作られたようなシチュエーションで、私と彼は二人つきり。

これが、机を一つ挟んでイスに座り、顔をつきあわせて覗き込んでいるものが日直日誌でなければ、噂話の一つや二つはあったかもしれない。

私がそんなくだらないことを考えている間に、目の前の男は妙にカクカクした文字を綴りながら尋ねてきた。

「寺井さん、コメントのところどうする？」

憧れとか好きとか気になるだとか、そんな感情はなかったはずだ。それでも卒業式を控えた前日にたまたま彼と二人つきりになれたことを、私はラッキーだと思ってしまった。それも、夕陽の射し込む放課後の教室。そんな狙いすまされたような絶好のシチュエーションで、日直当番という名目のもとに、私たちは机を挟んで向かい合わせに座っている。

彼が日誌にシャーペンで几帳面な文字を書き込んでいるのを眺めながら、前にもこんな場面があったな、とふと思う。以前に、あれはまだ三年に進級してすぐの頃、同じように日直当番で、彼とこつやって向かい合って日誌を書いたことがある。

あのときシャーペンを握っていたのは私の方だった。

「最後のコメントのところ、どうする？」

手を止め、そう尋ねた私に彼はほんやりと空を眺めながら言った。
「雨、降るかな」

それはたぶん独り言だったのだろう。聞き流しても支障のない類の。

「でも外、晴れてるよ？」

夕陽で真っ赤に染まった窓の向こう側を見て、私はちょっと首を傾げてみせる。

「うん……でも、きっと降る。寺井さん、傘持ってる？」

妙に確信を持って繰り返す。尋ねられて、私は首を横に振る。

持っていないよ。

持ってるわけがない。天気予報に映し出された今日の日本列島には、傘マークなんか一つもなかったんだから。

今だって、空には雲一つ見当たらず、私はまた疑問符を浮かべる。

「傘、いるかなあ……？」

「……いつかは、降るだろうから」

急にくつつけられた妙な理屈に、「そりゃそうだけど」と反論し、そうになって、やめた。代わりに、

「事前準備バツチりって感じ？」

冗談めかした調子で言ったら、彼はにこりともせず曖昧に頷いた。

靴箱のところで別れる時、じゃあ、と言いかけた私に、彼は無言で傘を差し出す。

「え……？」

「使って。寺井さんち遠いでしょ。俺んちはすぐそこだから」

「すぐそこって……」

確かに私の家よりは近いかもしれないけれど、彼の家は決して「

すぐそこ」と言える距離ではないはずだ。それに何より、傘の必要性を感じないので、

「ありがとう。でも、いいよ。雨降らないと思うし」

私は彼の傘を断った。

結局その日、私は家に着く前に突然降り出した雨に打たれ、翌日、見事に熱を出してしまったのである。

一年間、同じクラスにいたって一度も口をきいたことのない人は結構いるもんだ。私と彼も、日直当番というつながりがなければ、そういう関係でしかなかったと思う。

だけど、「最後だから」

卒業間近になって、そんな言葉を頻繁に使うようになった。

最後だから、一緒に帰ろう。写真を撮ろう。気になるあの子に話しかけてみよう。

最後だから。まるでそれで全部許してもらえるみたいに……。

私もみんなと一緒にだ。

最後だから、もう二度とこんなチャンスは訪れないかもしれないから。

「あの子、もしかして堂本は、天気がわかるの?」

自分がものすごく突拍子もないことを言っていることはわかっていたし、変な目で見られることも覚悟していた。

なのに、彼は、堂本は、

「ちょっとだけ」

まるで外国人に「Can you speak English?」と尋ねられて「A little」と答えるような自然さで返してみせた。

やっぱり。と、どうしよう。が混在中の私の頭は、次の言葉を探している。「Really?」とでも聞けばいいのだろうか。無意

味だとわかっていても。

たぶん彼はそんな冗談や嘘を言うタイプではない。

「なんで？」

結局出てきたのはそんな問いで。

堂本は少しばかり困ったように眉を顰める。

「なんとなく」

なんだそれ。

「それより、寺井さんはなんでわかったわけ？」

私の心のツツコミが声になるよりも早く、堂本が問う。

今度は困ったのは私の方だ。

きっかけは、あの日直当番の日だった。だけどその時はまだ、ただの偶然だと思っていた。

しかし気をつけて見ていると、堂本が傘を持ってきている日は、朝どんなに晴れていても夕方までには必ず雨が降るのだ。言ってみればそれだけのことで。

堂本は天気がわかる、という結論も私の思い込みで片付けようと思えば片付けられるレベルのものだったはず。

けれども、その一連の流れを説明するのは面倒だったし、何より困るのは、私がそんなにも堂本を見ていたのを知られることだ。

そんな複雑な乙女心を抱えながら、結果出てきた返答は、

「なんとなく」

「なんだそれ」

堂本が笑った。

「明日は晴れるといいね」

卒業式という最後の行事は、できれば晴れの日で迎えたい。

日誌のコメント欄に、堂本がシャープペンを走らせる。

『明日は晴れる』

その予言は、見事に的中した。

駅の構内に溢れかえる人。誰もがみな、途方に暮れたように外を見て溜息を吐く。

外は土砂降りの雨だった。天気予報のお姉さんはそんなこと一言も言っていないのに。

雨が降ると、いつも、彼を思い出す。

結局、堂本とは卒業式以来、一度も会っていない。どこの大
学に行ったのかも、私は知らない。

もう二年が経っていた。

ぼつと立っている私の横に、ふと背の高い影が並んで、反射的に仰ぎ見る。

すぐにわかった。彼だと。

「寺井さん……使って。俺んちは、すぐ近くだから」
相変わらず気を使うのが下手な彼は、私に自分の傘を差し出しな
がら言う。

「ありがとう。でも、いいよ」

あの日を繰り返すみたいに、私は彼の申し出を断ってしまう。
鞆の中から、折りたたみ傘を取り出しながら。

「事前準備バツチリじゃん」

彼が笑った。

私たちの間にそれ以上の会話はなかった。

久しぶり、とか、また今度遊ぼうよ、とか言えばいいのに。堂本
は残念ながらそういうタイプじゃない。

傘を差して雨の中に消えていく堂本の背を見送った私の隣に、ま
た、別の人影が並んだ。

見上げてみると、今度は予想通りの男の顔がある。

糸のように細い目をさらに細めて、無言で問いかけてくる。今の
誰？と。

「彼も、魔法使いなんだよ」

「へえ」

「妬ける？」

傘を持つ彼の手に、自分の手を重ねる。

「俺より凄い魔法使いならしょうがない」

彼は私の手をやんわりと退けて、傘を差した。

「それなら彼のほうが勝ってるかな」

何しろ堂本は、天気を当ててしまうのだから。

懲りずに腕を組んで歩き出す。傘は持ちにくそうだったけど、邪見にはされなかった。

少しは嫉妬してくれるかな、と思って顔を盗み見る。

変わらない彼の表情に不安になって、慌てて言い直す。

「でも、多聞たもんの魔法のほうが私は好き」

隣にいる魔法使いは、少しだけ悲しそうに笑った。

君がいない夏(1) (前書き)

大変、お姉ちゃんが帰ってきてちゃった！逃げるようにして家を出たあきちゃんが、月並小学校で過ごすひと夏の物語。未だ失恋から立ち直れないあきちゃんに、新しい恋！？一方、冴えない夏休みを過ごす吏一は……。

君がいない夏(1)

一体、何から話せばいいんだろう。

あまりにもたくさんの方がありすぎたんだ。

長くて短い夏休みに私が向き合っていたのは、先生が出したたくさんさんの課題と、魔法使いに関わるちょっとした問題。

それから、ある人との出会い。

早くおジイに聞いてほしくて、喫茶「またたび」に向かう足取りを急がせる。ああもう！ セーラー服を着ていれば、もっと早く走れるのに。

緩いハーフパンツに、体の線が分かりにくい大きめのTシャツ。上からロングのパーカーベストを着てスニーカーで駆ける今の私は、ただの男の子だ。

もちろん、私がセーラー服を着ていない理由は「まだ学校が始まっていないから」じゃない。そんなの最初から、私にとっては関係ないってこと、説明するまでもないよね。

走りながら、思い出す。

この夏の間、私と、私の周りの魔法使いたちに起きた物語を。

少しだけ長くなるけど、順番に話してもいいかな。

そう、お姉ちゃんが、家に帰ってきたところからだ。

八月に入ったら、私は毎年恒例のアルバイトに行くつもりだった。アルバイトって言っても、ただのお手伝いなんだけどね。

だから七月のうちに課題をなるべく終わらせておきたくて、英語のノートを開いた瞬間　つまり、佐々倉先生の恋人であり婚約者

である三島女史を思い出してブルーの底に沈みかけた時だ。

「ただいまー」

聞き覚えのある声が、私の部屋の外、長い廊下を伝わって玄関から聞こえてくる。

すぐに分かった。

お姉ちゃんだ。

なんで？ 帰ってくるの早すぎない？ いつも八月に入ってからじゃないの？

「あら、綾。もう帰ったの？」

「授業、もうゼミだけだから。発表が終わったから戻ってきてちゃった」

お母さんへの説明で事情は分かったけど、分かったところで私の状況は何も好転していない。

お姉ちゃんの声に聞き耳を立てながら革靴を手に掴む。

足音が徐々に近づいてくる。隣の部屋の前で止まり、扉を開く音がした。隣は、お姉ちゃんの部屋。

ほとんど準備を済ませていたリュックの中身を最終確認。足りない分は悪いけど後でお母さんに持ってきてもらおう。

英語のノートを閉じて勉強道具一式と一緒にリュックに詰め込む。窓を開けた。白く眩むような強い日差しが目を焼く。

帽子、

「ちよつと彰彦!？」

ダメだ、諦めよう。

ヒステリックな呼び声を合図に、私は飛ぶ。セーラー服のスカートをふわりと広がらせて。二階の部屋の窓から。

着地、成功。そのまま庭を駆け抜ける。背後でお姉ちゃんの高い声が聞こえた気がしたけれど、かまうもんか。

荷物の重さだって気にならない。セーラー服を着た私は、どこまでだって走れるんだから。

あ、しまった。お気に入りのリップを机の上に忘れてきちゃった

よ。お姉ちゃんに見つからないといいな。
それだけを願って、私は逃げたんだ。

「あ！ あきちゃんだー！」

私よりもずっと小さな影が、太陽の下を全力で駆けてくる。両手を広げて。元気いっぱいのでその愛称を呼ばれると、お姉ちゃんから逃げてきた緊張感とか罪悪感とかが少しだけとける。

そのまま抱きついてくるのかと思って待っていたら、目の前で急停止した少年は、あるうことか私のスカートに手をかけて、

「えいつ」

「きゃあああ！？ 直登、君！？」

慌てて押さえたけれど、遅かった。やばい。今のは絶対見えた。

やだ、恥ずかしすぎる！

だって、トランクスなんだよ！？

だけど直登君はけらけら笑ってた。いたずら成功に満足して。

直登君にとつてはスカートの中身なんかどうでもよかったみたい。スカートめくりっていう行為そのものが、きつと楽しいんだ。

「もう！ こーら！ 去年はこんなことしなかったのに」

拳を握ってパンチの真似をすると、直登君はさらに嬉しそうな顔をして走って逃げていく。

追いかけてようと踏み出した足を、優しく止める声があった。

「あきちゃん？」

振り向いた私は、みすずさんと、もう一人、麦藁帽子をかぶった女の子を見つめる。直登君よりも背の高い、線の細い女の子。

隣のみすずさんは、少しだけ不思議そうな顔をして私を見ていた。私が、ここにいるから。

「こんにちは……あの、ごめんなさい。少し、早いですけど」
本当なら、ここには八月から来るはずだったのだ。

荷物を持つ手に力を込めて、みずずさんの顔を見る。血色の良い、まん丸顔の笑い皺が深くなる。

「あら、大丈夫よ。あきちゃんが居てくれた方が助かるわあ。さ、暑いからお入りなさいな」

そう言っつて、みずずさんは私を校舎に招き入れてくれた。

木造の、古くて小さな小学校校舎。

『月並小学校』

校舎の入り口にある木の板には、今はもう使われなくなって久しい学校名が、色褪せたまま残されている。

「あきちゃん、走ってきたの？ 汗かいてるわ」

みずずさんに言われて初めて、私は額や首筋がベタベタすることに気づいた。

セーラー服を着ている間は全然、疲れなんて感じないんだけど、こういうのはどうしようもない。

「着替えてくるね」

セーラー服が汗くさくなるのはイヤだし。

リュックを持ったまま近くの教室を借りて着替えることにする。

小さな机が並ぶ教室。古い黒板。木の教卓。

どれも懐かしい。

私を通った小学校は、ここじゃない。電車通り沿いの隣町との境に、比較的新しい校舎の小学校がもう一つある。

この月並小学校は、私が小学生の頃にはもうとっくに廃校になっていた。だけど、夏休みになると私は毎年ここに来る。私だけじゃない。魔法使いの子供たちが。昔は、お姉ちゃんも一緒に来てたんだよ。

さつさと着替えてしまおうと、リボンをほどいて裾を首元までたくしあげる。同じタイミングで、立て付けの悪い扉が、きしむ音とともに開かれた。

ヒツと変な声が出る。

「あ、悪い」

すぐに扉は閉められたけれど、一瞬だけ見えたのは大人の男の人で。

「び、びつくりしたあ……」

心臓がドキドキゆつてる。

別に、見られて困るわけじゃないんだけど。女の子じゃないんだから……ううん、変な目では見られるだろうから、困ると言えば困るのかな。

ゆつくりと息を吐く。頭の中が冷えていく。

変な目で見られるのは、イヤだ。

幸いにも私の周りの大人たちはわりと理解をしてくれていて、おジイもみすずさんも、またたびのマスターも、私を変な目では見ない。

お父さんとお母さんは見て見ぬフリをする。理解はしてないと思うけど、それはそれでありがたいからいいんだ。

やっと心臓が落ち着いてきて、着替えを終えた私は教室の外に出る。

さっきの男の人は誰だったんだろう。

みすずさんと直登君、麦わら帽子の女の子の三人はとなりの教室にいた。

「みすずさん、誰か来てたの？ 男の人」

「え、ええ。あきちゃんも会ったの？」

「会ったというか、見たというか……」

見られたというか……。

「大丈夫よ。きっともう、来ないわ」

私はそんなに不安そうな顔をしていたのかな。

みすずさんが、そんな風に言う。だけどその顔はちょっとだけ寂しそだった。

「さ、今から直登君と美佳ちゃんよしかに魔法使いの話をするんだけどあ

「きちちゃんも聞く?」

「聞きたい!」

みずずさんが話を意図的に変えたのは分かった。分かったけど、わざわざ追求する気はない。

魔法使いの話も聞きたいしね。

夏休みにここに来るたび、何度も聞いた話。月並町の魔法使いの物語。

直登君と私、それから、美佳ちゃんが机を並べて座った。

教壇に立つみずずさんは、先生みたいにみんなの顔を見回して、につこり笑う。みずずさんは昔、本当に先生だったんだよ。だから今だって、授業はお手のもの。

「はい、授業を始めましょうかね。今日はね、音楽に愛された魔法使いのお話よ」

「私、その話知らない」

「それじゃちょうどいいわね。月並町にはみんなが思っているよりたくさん魔法使いがいるのよ」

みずずさんやおジイはとっても顔が広い。だから私も何人かの魔法使いの話を聞いたことがあったんだけど、そんなのはほんの一部の話みたい。

そういえば、吏一君のことも全然知らなかったもんね。

「せんせい、はやく話してよー」

待ちきれなくなった直登君が先を急かす。

「舞台は魔法使いの町、月並町。時は、今から何十年前も前ね。私はまだ学生だった。同級生にとっても綺麗な女の子がいたの。だけど、その子は生まれつき話すことができなかった。手話って分かるかしら」

コクリ、と首を縦に振る。となりの美佳ちゃんと直登君も神妙な顔で頷いた。

「私と彼女のやりとりはいつも、手話か筆談だった。仲良しだったわ。彼女は博識でね、いろんなことを教えてくれたの。それに、歌

「がとても上手だった」

「さつきしゃべれないって言ったじゃん！」

直登君が大きな声を上げる。

「そうね。それは本当。でも、彼女は歌えたの。マイクを通すと…」

…

「あつ！ マイクが、魔法の道具なの？」

「あきちゃん、正解」

「そんなくらいおれだつてわかつたもん！」

拗ねてしまったとなりの直登君に、ごめんねと小さく舌を出す。

「月並町の魔法使いは、みんな魔法の道具を持つてるものね。私たちはきつと、魔法使いというよりも道具使いなの。相性の良い道具を使って、少しだけ、ほかの人にはできないことができちゃう。」

超能力者って言う人もいるけど……」

みずずさんはそこで、少し苦笑いをして見せる。

「どうして私たちが『魔法使い』なのか、わかるかしら？」

「えーと、んーと……」

直登君が一生懸命考えているから、私は答えを黙っておく。知ってるんだけどね。

「……おじいちゃんが、言ったから？」

遠慮がちな細い声は、私のとなりから。美佳ちゃんの声だった。

初めて聞いた。

「なんでさきに言っちゃうんだよ！ おれだつてわかつたのにー」

再び出番を奪われた直登君が口を尖らせる。

「直登君が答える番もあるから大丈夫。ね？ 美佳ちゃんの言ったとおり、魔法使いって呼ぶことに決めた人がいたの。それまではみんな、好き勝手に呼んでたわ。超能力者や超人、奇跡の人、神様だなんて言い出す人もいたけど、大半の月並町の人たちはそんなに大層なものじゃなくて、ただ、少し不思議な力があるだけだと思つたのね」

みずずさんはそこで一度、言葉を切った。

私の力は、おジイや吏一君の力に比べたらきつと、周りの人に気づかれにくい。だって、運動神経が良いとか体が疲れないとか、運動が得意な人や体力がある人にとっては当たり前のことなんだ。

もしかしたら、セーラー服を着た私はオリンピックピク選手よりも速く走れるかもしれない（試したことはないけど）。

だけど光よりも速く走れるわけじゃない。

ただ、人を少しだけ追い越したところにいるだけ。

確かに、超能力者や超人って言うとかツコ良すぎて引け目を感じちゃうし、奇跡な人だなんて大袈裟だ。神様なんて言われた日には勘弁してって言いたくなっちゃう。

私は魔法使い。たった一つだけ、魔法が使える魔法使い。魔法の杖を振る代わりに、セーラー服を着るの。

「ねえみずずさん、おジイってもしかして偉い人なの？」

私は聞いてみた。宮司の家と同じで、おジイの家もかなりの旧家だけど、私は実はおジイのことをあまり知らない。でも、おジイが「魔法使い」って言い出したならみんなもそれに従ってことは、きっと、相当偉い人なんだろうなあって。

そこまで口に出して説明しなくても、みずずさんには私の聞いたかったことの意味が分かったみたい。

「偉い、のもあるんでしょうけど、あの人の家がちょうど、みんなのお世話をする当番の年だったから、町中に伝えやすかったのもあるんでしょね」

「でもやっぱり変なのー。まほーつかいはほつきにのって空とんだり、杖ふってじゅもん言うんだぜ。そんでわるいやつをやっつけるんだ！」

直登君が語るのは、物語の中の魔法使いのイメージ。

うん、そうなんだよね。

私も、魔法使いって言ったらやっぱり、猫やコウモリなんかの使い魔を連れて、黒いローブを身につけて、魔法の呪文を唱えれば、病気を治したり変身したり、人を殺すこともできたり、そういうイ

メージなんだ。

「そうねえ……でも実は、いたのよ。あの頃、とつても名物になっていた魔法使いがいたの。魔法の杖を持った、おばあさんが」

「杖？」

「そう、本当に魔法使いが持つような杖。おばあさんはね、その杖で月並町の宝を見つけたのよ。まるでおとぎ話の中の魔女みたいに、杖を振ってね。あの人がいなかったら、魔法使っていう呼び方は定着しなかったかもしれないわ」

「おたから！？」

直登君は急に目を輝かせてそわそわし始める。

「そう、お宝。なんだかわかるかしら？ ヒントはこれ」

みずず先生は後ろを向いて、黒板に赤いチョークでマークを一つ描いた。

「あー！ はいはいはい！ おれ知ってる！」

「はい、直登君」

「おんせん！ 月並温泉だっ」

「正解。よくできました」

やっと答えを言えた直登君がとてもうれしそうに胸を張る。おめでとう、と笑った私は、本当にちゃんと笑えてたかな。先生が、いつも向けてくれるような優しい笑顔で。

まさか、赤いチョークを見ただけでこんなに悲しい気持ちになるなんて思わなかった。

みずず先生の授業が終わって、私は一人で校舎を抜け出した。学校にいるのがちょっとだけつらい。黒板を見るだけで、廊下を歩くだけで、教科書を見るだけで先生のことを思い出してしまう。

夏休みに入ってから折角、忘れかけてたのにな。

月並町を囲む山の一角にある月並小学校。校舎の裏手に続く森の奥へ、分け入っていく。

森の奥に流れている川へと、涼しさを求めて歩いた。セーラー服を着てないからサンダルを履いた足はすぐに疲れるし、ハーフパンツから出た素足は草が当たって痛いし、息もすぐに上がって、ああもう最悪だ。

長い前髪だけは分けてピンで留めていたけど、額に浮いた汗が頬を伝って落ちてくる。

辿り着くまで思ったより時間がかかった。川の傍は、水があるおかげか空気が澄んでいて、穏やかな流れの縁に腰掛け、迷わずサンダルを脱ぐ。

「つめた……」

ゆっくり、ひんやりとした水に足を浸ける。木陰に吹く風も汗を乾かしてくれる。

暑さにほてった体が徐々に落ち着いていくのと同時に、だんだん頭も冷えてきて、思い出すのは先生のこと。

折角、学校から出てきたのにダメだった。一人になったら、余計に思い出しちゃう。

先生の顔、声、チョークを持つ手、後ろ姿、少しだけ群青色に見える目。

想っても、しょうがないってわかってるのにな。

想像の中で笑う先生の隣に、三島先生の姿が勝手に浮かんでくる。振られたときは自分が振られたっていうことだけでいっぱいはいっぱいで、三島先生のこと、あんまり気にならなかったのに。

今さら、悲しい。

私が見ただけで先生を見ることしかできなかった間に、二人は、付き合ってたんだ。

こつこつという気分、なんていうか知ってるよ。

「……みじめ」

口に出したら余計に。

しかもしかも！ あの時たぶん、三島先生は知ってた。私が告白しようとしたこと、わかってて、私と先生を二人きりにしてくれただ。

敵に塩を送られるってこういうことなのかしら。

悲しいのか悔しいのか、よくわかんない。たぶん両方。

どうせ誰もいないから、頬を伝った涙もそのまま。うつむいて瞬きしたら、川の水の中に静かに落ちて混じり合う。

後から後から、こぼれ落ちてくる。

もう、こんな思い全部流れ出してしまうばいのに。持ち続けておくのも、拾い集めるのも、しんどいや。

蝉の鳴き声がうるさいから、安心して嗚咽を漏らす。家だと声を上げて泣くことはできなかつたから。

蝉の声と私の泣き声と、川を流れる水音、風が揺らす木々の葉音。不意に混じる、カシャツ 機械音。

私はびっくりして、声も、涙も止まっちゃった。今日は驚いてばかり。

音のしたほうを見ると、いつの間に来たんだろう。男の子が一人立っていた。カメラを構えて。

「邪魔してごめん。でも、君を撮ったわけじゃないから安心して」
重たそうな一眼レフカメラに隠れていた顔を見せて、人懐っこく笑う。見たことない顔だった。同じ年か、少し上くらいかな。

私はまだ心臓が縮こまったままで、上手く答えることができない。「気にせず続きをどうぞ。泣いてていいよ」

カメラ少年は悪びれもせずにそんなことを言うもんだから、さすがの私もカチンときてしまう。

気にせずって……。

「泣けるわけない」

「ああ、そう？ じゃあ、お詫びに胸を貸そうか」

思わず抗議した私に向かって、少年はさらりと提案して両手を広

げる。

ええっ？ って、なるでしょう。だって、意味が分かんない。呆れて返す言葉が見つからない。

それなのに、

「顔、真っ赤」

少年はにやつと人の悪い笑みを浮かべた。からかわれたんだ。

「んなっ……これはっ暑いんだよ！」

腹が立ったので、川に浸けていた足を思いっきり蹴り上げて水しぶきを上げてやる。セーラー服を着ていない私の蹴りなんて大したことなかったんだけど。

「わっ……それは反則だろ。カメラが壊れる。折角いい泣き顔が撮れたのに」

「え？ やっぱり撮って……！？」

そんなのって恥ずかしすぎる！

文句を言おうとした私の言葉を遮って、彼は笑う。

「冗談だよ。先生のこと、好きなの？ 失恋でもした？」

またからかわれた。けどそのことよりも、核心を突く質問が続けざまに飛んできたほうが大問題だ。

「なんで知って　！？」

「口から出てた。先生、先生、って」

うわあああ恥ずかしい！ もう嫌だ。穴を掘って埋まってしまいたい。

初対面の人に泣き顔を見られて、失恋さえもあっさりバレて、今日は厄日に違いない。そうに決まってる。

思わず覆った目元が、まだ熱い。だけど、涙はもうすっかり渴いていた。さっきまで、二度と止まらないんじゃないかってくらい溢れてたのに。

「良かったら、話してみる？」

「へ！？　なんで？」

となりの岩に腰掛けながら、彼は気安く提案する。

「話したら楽になることもあるじゃん」

「でも、初対面なのに……」

はじめましての挨拶代わりにそんなデリケートな話をできるほど、私の神経は凶太くないのだ。

知り合い相手でも、話をしたのはおジイ一人だけだっていうのに。しかも、おジイは根ほり葉ほり聞いたりしないから、失恋したっていう結果報告しか伝えていない。

おジイは黙って私の頭を皺くちやの手で撫でてくれた。そのときも涙腺がやばかったんだけど、「またたび」にはほかにもお客さんが居たから、ぐっと堪えたんだよ。

だから、私がほかに話をできる相手がいるとしたら 吏一君。普通にしているとキリっとかっこいい顔が、私の頭の中で優しく笑う。

いつだって、吏一君は優しくかった。会ったばかりの私の恋に、嫌な顔一つせずに協力してくれて。

結局、吏一君にはあれつきり会わないまま、ここに来ちゃったな。学校の友達はもちろん、私が先生を好きだったことなんて知らないし むしろ隠してきたことだ。言えるわけがない。

「初対面のほうが話しやすいことだってあるよ」

私の心の中を見透かすようなタイミングで、目の前の少年が語りかける。妙に落ち着いた声で。

「そう、なのかな……」

そうなのかもしれない。私の場合は、特に。

彰彦を知っている相手には、話せない。あきちゃんを知っている人でなければ。

隣の少年を見る。思いのほか近い距離で、黒目がちな両眼とかち合う。

私が迷っていることも、わかったみたい。

「今、話せないってことはさ、まだ消化しきれてないんだよ。話しながら整理する方法もあるんだけど、まだそこまでいってないだけ」

「話せるようになる?」

「なるよ。今は悲しくて辛いばかりでも、ちゃんと気持ちの整理がつく日が必ずくるよ」

「いつ?」

「それはさ、人によって違うからなんとも言えないけど。君の場合はね、名前、何ていうの?」

「あ……」

尋ねられて初めて、不安になった。

どうしよう。

今の私は、セーラー服を着ていない。

少しだけしてたメイクだってきつと、涙で落ちてしまった。

今の自分は、果たして女なのか男なのか。

相手には一体どう見えているのか。

どうしよう。

わからない。

「……あ、きつて、呼ばれる」

「アキ?」

うつむき加減で告げた名前は、相手の耳にちゃんと届いたみたい。男でも女でも大丈夫な愛称で良かった。

「そ、そっちは?」

「じゃあ、俺はコウ」

「……コウ、君」

じゃあって何よ。と思ったけど、黙っておく。私の名前につっこまれても困るしね。

相変わらずの蝉の大合唱に混じって、それほど遠くない場所からチャイムの音が聞こえてくる。古い拡声器みたいな割れた素朴な音。月並小学校のチャイムだ。普段は使われてないんだけど、みずずさんがいる間だけは鳴るようにしてあるんだって。

それを合図にするみたいに、コウ君が立ち上がる。背、思ったより高いな。私が座ってるんだから見上げるのは当たり前なんだけど、

全体的に細いせいかな。縦にひよる長い。着る人を選びそうな派手なチエツクの細身のパンツは、不思議とよく似合ってた。

「八月中は時々この辺で写真撮ってるから」

私の顔をのぞき込んでくるコウ君の口元が一瞬だけにやっと笑みの形を作る。目の前で、声には出さずに口だけが動いて。

また会いたいな、アキちゃん。

たぶん、そう言ったんだと思う。私の勘違いじゃなければ。

コウ君は身を翻して、私が来た道とは反対方向へと足を向けた。

一度だけ、振り返ってカメラを構える。みつともない顔を慌てて隠そうとしたけど遅かった。シャッター音一つ。

「今度会う時には、失恋話ができるようになってるといいね」

「もう！」

木立の中に消えていく後ろ姿に怒鳴ってみたけど、本当はそんなに怒ってなかった。

だって、コウ君と話してる間は、先生のこと苦しい気持ちも泣くことも忘れてたんだ。

「よし！」

少しだけ気持ちが上向いたのは、きつとコウ君のおかげ。不思議ね。初対面なのに、なんだかずっと前から知ってる友人みたい。

立ち上がって伸びをしたら、ちょうど、木々の間から月並小学校の屋根が見えた。

帰ろう。

水に浸けていた足を大きく振って、水気を飛ばす。サンダルを履き直して、一步を踏み出したところで気づいた。

そういえばコウ君、私のことアキちゃんって呼んでたな。

セーラー服を着てなくても、女の子に見えるんだ。

うれしい、のかな。

またわからなくなりそうだったから、今はとりあえず考えるのを放棄した。

君がいない夏(2)

大学二年生の夏休みなんて、遊ぶためにあるようなもんだ。

同級生が海だ花火だ祭りだと滑り込みセーフで手に入れたカノジヨたちと遊び呆ける中、俺の夏休みといえば、最悪だ。

スタートは悪くなかった。テストが終わった直後は明けコンと称した飲み会がいくつもあったし、大学の友人と海にも行ったし、それほど寂しい日を過ごしたわけではない。

ただ、お盆に入ると県外組はそろって帰省。後半になってからはバイトが一人辞めたせいでクソ店長に鬼のようなシフトを組まれていた。「どうせヒマなんだろう？」と鼻を鳴らした川岸が恨めしいというわけで、暑さもうだる八月後半、貴重な大学二年生の夏休みの真っ直中に、俺はバイト先「ムーン&リバー」でせつせとアイスコーヒーを運んでいた。

あれほど閑古鳥の鳴いていた店内も、夏休みに入ってから「忙しい」と言えるほどに客足が増えている。良いことだ。良いことだが、もう少しバイトの人数を増やしてくれ。

狭い店なので基本的にバイトは二人で回るが、これが九連勤になると文句の一つも言いたくなる。

そのくせ今日は店長の川岸は欠勤だった。おい。

一番客の多い魔のおやつタイムを過ぎて店内が落ち着いてきたころ、階段を上ってくる足音が一つ。

扉の開く音に、手に持っていた伝票から顔を上げる。長い髪を下ろした、オフモードの彰子さんがいた。

「いらっしやいませ」

「こんにちは。いつ来ても、君はいるのね」

感心しているのか呆れているのか、なんとも言えない顔をして彰子さんは呟く。たぶん、バイトばかりしている可哀想な奴だと思われるに違いない。

彰子さんは時々こうやって客として店に来てくれる。どうやらこのアイスコーヒーが気に入ったらしい。

「俺だって、せっかくの夏休みがこれでいいのかと思ってはいるんですけどね」

「あれから『あきちゃん』には会えたの？」

いつものカウンター席に腰掛けながら、彰子さんはさらりとその名を口にする。

「彰子さん、お願いだからそんなにあつさり地雷踏まないで」

「あら、ごめんなさい」

お詫びのつもりだろうが、コーヒーをケーキ付きで注文した彰子さんは静かに笑った。夏休み前にプロポーズをされて結婚式の日取りも決めたばかりの彼女は、会うたびに綺麗になっていく。

あきちゃんのことを好きな俺でさえ、うっかりすると見惚れてしまっただけ。

「夏休み中はずっといないらしくて」

「どこに行ってるの？」

「それもわからないんですけど……」

我ながら情けない答えだ。好きな女の子のことを、俺は一つも知らない。

「ぼやぼやしてたらほかの男にとられちゃうわよ」

彰子さんは容赦なく地雷源に踏み込んでくる。これだから気の強い年上女は苦手なんだって。

「あきちゃんはそんな子じゃありません。佐々倉先生に失恋したばっかだし」

「あら、失恋したばかりだからこそ、よ。弱ってる時に優しくされたら、そんなつもりなくなっただってうれしいし、好意だって持ちちゃうかもしれないわ」

そうですね。ってあつさり論破。ダメだ。口では勝てる気がしねえ。

でもそれでいくと、あの日失恋したあきちゃんをその直後に慰め

たのは俺だ。泣いてるあきちゃんの詳細な肩を抱きしめて　は無理
だったので、肩に手を添えただけ。

「でも、あきちゃんは佐々倉先生のことすごい好きでしたよ」

「ささやかな反撃を試みる。」

「ただ、彰子さんはレアチーズケーキをパクリと一口食べてから、
につこり笑った。」

「そりゃあイイ男だもの。しょうがないわよ」

「幸せの絶頂にいる彼女には隙などどこにもなかった。」

「むしろ、そのノロケにダメージを受けたのは俺のほう。」

「幸せそうで何よりです」

「ありがとう。吏一君も、頑張つてね」

「何をどう頑張ればいいんだろうか。」

「彰子さんは、きつと頑張ったんだ。」

「逆プロポーズをして佐々倉先生をその気にさせた。」

「あきちゃんも頑張ったけど、彰子さんの頑張りのほうが上だった
のかもしれない。」

「俺は、頑張ればなんとかなると思えるほど楽観的な性格をしてい
ない。だけど彰子さんが言うのと、不思議と嫌な感じはしなかった。」

「頑張ります」

「何を？」

「え？」

「まさかそこを聞かれるとは思わなくて驚いた俺に、彰子さんはい
たずらっぽく笑って、

「側に居てあげてね。本当に困ってる時に……助けてほしい時に側
に居てくれる男は絶対に特別な存在になるから」

「彰子さんの言葉は力強い。たぶん、彼女自身の実感がこもってい
るからだ。詳しいことは聞かなかったけど、彰子さんの特別な存在
になった男が誰のことかは、言わなくてもわかるよな。」

「コーヒーを飲み終えた彰子さんは、またね、と店を後にする。手
を振って見送った後、思わずため息が漏れた。」

店にかかるカレンダーの、八月の残り日数を数える。あきちゃんの夏休みが終わるまで、あと十日余り。

八月が終わったなら、すぐに会いに行こう。決めた。それで、デートに誘う。

密かに決意して、カウンターテーブルに残った皿とグラスを片づけていると、先ほど閉まったばかりの扉が再び音を立てた。

「やあ、働いてる？」

暢気に顔を覗かせたのは川岸で。その童顔は笑うとますます幼く見える。しかしこんななんでも店長だ。

「てめえが働かせてんだろ」

「正解」

ふざけた調子で答える川岸は、暑そうに額の汗をぬぐいながらカウンターの席に腰掛けた。さっきまで彰子さんが座っていたイスだ。

「吏一、コーヒー一杯」

「は？ 客面する気かよ」

面倒くさいけどこんな使えない店長の注文にもちゃんと応えてやる俺はやさしいと思う。

コーヒーを準備する手を動かしながら、川岸の顔を見る。手をパタパタとうちわ代わりに動かす男は、喉元を晒して暑さと戦っている。

「その傷、どうしたんだ？」

顎の下辺りから顔の輪郭に沿って右へと数センチ、絆創膏が見えて、尋ねてみた。

「ああこれ？ 彼女に、ちょっと」

絆創膏に手を触れながら、川岸が殴りたくなるような答えを返す。川岸にでさえ彼女がいるなんて。

「今日もよろしくしてたってわけかよ」

「童貞の嫉妬は見苦しいな」

「童貞じゃねえっ」

声をひそめながら反論した俺の目の前に、川岸はいきなり一枚の

コースターを取り出して見せる。

「なんだこれ」

「今日は仕事だったんだよ。本店でこれの打ち合わせ。明日からのコースター使うから」

「ふーん」

そんなのは別にどうでもいい。けど何かが引つかかって、俺はそのコースターを受け取って見てみる。

鮮やかなスカイブルーの空に浮かぶ雲。丸い円を縁取るように金に近いオレンジ色の文字が描いてある。

Are you a wizard ?

これと同じものをどこかで見た。わりと最近の話だ。どこだったっけ。

「コーヒーまだ？」

俺の思考をさえぎるようにして、川岸が催促する。

コースターをひとまず脇に置いて、カップソーサーを川岸の目の前へ。白い湯気が揺れるホットコーヒーを見て、川岸は心底嫌そうな顔をした。

君がいない夏(3)

月並小学校の一日はラジオ体操から始まる。

直登君と美佳ちゃんは小学生だからね。直登君なんて一番に飛び起きて、元気よく校庭に飛び出して行く。

私はラジオ体操カードにハンコを押す係。

二人が音楽に合わせて体操してる間、木陰のベンチに座って欠伸をかみ殺す。

みずさんの作るあさげの匂いがゆっくりと校舎のほうからただよってきて、自然と頬が緩んだ。

ここでの仕事はそんなに多くない。

朝ご飯を食べた後はみんなです少し掃除をして、小学生二人は宿題の時間。私は洗濯のお手伝い。

途中から私も宿題に参加するけど、直登君はすでに集中力をなくして、いつつも私の邪魔ばかりする。おかげで課題がちっとも進まない。

「あきちゃんあきちゃん！」

今日も元気にまわりついてくる直登君が私を呼ぶ。聞こえないフリを試みる。あんまり効果はないんだけどね。

座ってる私の後ろから首に腕を回してぶらーんと、く、苦しい！
いくらセーラー服を着ても不死身じゃないんだからね。

「こら！ 苦しいでしょ！」

「あきちゃんマンが怒ったー！」

怒られて嬉しそうな直登君はきゅきゅと私の周りを跳ね回る。

「もっ……」

ここで本当に怒ったら思うつぼ。暑さのせいで苛つきやすくなっている頭を冷やそうとして、息を吐く。

だけど、ほだけかけていたセーラー服のスカーフを直登君が引っ張るもんだから。

「あっ」

あっさりと引き抜かれた私のスカーフ。
途端に首もとが寂しくなる。

「こらっ！ 返しなさい、直登君！」

そのままスカーフを手に教室を飛び出して行く直登君。私もすぐに後を追いかける。

相手は小学生。すぐに追いつけるはずだ。いつもならば。気付いたのは、階段を駆け降りる足がもつれそうになった時。

あれ、おかしいな。セーラー服を着ているはずなのに、変だよ。全然、速く走れない。

足が重い。息が上がる。腕が振れない。体が思うように動かない。これじゃあまるで、セーラー服を着てない時の私みたい。

渡り廊下に出たところで、直登君はなぜか立ち止まって私を待っていた。

「あきちゃんおっそい！ なにやってんだよー」

「だって、直登君が速くて……」

どう答えたらいいのかわからない。こんなのは初めてで。

気持ち悪い。きつと、走ったからだ。

とにかくスカーフを取り返さなければ。

そうすればこの気持ち悪さがなくなる気がして、私の手は、直登君が握りしめているスカーフの片端を掴む。

「返し……！」

「えーっやーだよー」

スカーフの反対側を掴んで離さない直登君と、二人で引つ張り合いつつこみたいになって。

あ、まずい。

そう気づいた時には遅かった。

耳障りな音。

私のスカーフが、二つに裂けて

「あっ……うそ……」

崩れ落ちるみたいに膝をついた。自分の体を支えてもらえない。きもちわるい。どうしよう。

周りの音が何にも聞こえないのに、自分の心臓の音だけが異様に大きくて、気持ち悪い。

「……あきちゃん！」

これは、直登君の声だ。

ようやく、泣きそうな顔をしてこっちを見ている直登君の顔を認識する。私の方が泣きたい気分だ。

「あきちゃん、だいじょーぶだよ！」

大丈夫？

大丈夫じゃないよ。

胸が痛い。力が入らない。魔法が効かない。

「おれがなおしてやるよ！」

「……え？」

直登君がポケットから取り出したのは、小さなポンド。木工用ポンドだ。

「おれのまほうでなおしてやるよ！ あきちゃんのスカーフ」

小さな魔法使いは頼もしく言い切ると、破れたスカーフの切れ目にポンドを塗っていく。

木工用ポンドだよ？

スカーフは、布でできてるんだよ。

普通の人だったら笑ってしまう場面だ。

だけど、直登君は魔法使いだから、私は黙って見守ることにする。破れた切れ端の片方をポンドを塗った場所に重ねて、直登君はその上からぎゅっぎゅっと手のひらで押さえつける。ただそれだけ。

「よし、できた！」

直登君がスカーフを広げて見せてくれる。

「う、嘘……」

手品のようだった。

何事もなかったかのように、元の形のままのスカーフが、窓のない渡り廊下を通り抜ける温い風に、揺れる。

受け取って、確かめる。切れ目なんてどこにもない。ただ、ほんの少しだけ木工用ボンドの匂いが残っていたけれど。

「直ってる……」

魔法みたい。という言葉葉を飲み込んだ。その表現は正しくない。

だってこれは本当の魔法だもの。

「凄い。……ありがとう」

大事な大事なスカーフをぎゅっと握り締めて、襟の下に通して結び直す。胸の辺りにくすぶっていた吐き気は途端に収まって、気持ちもずいぶんと楽になった。

ああ、よかった。

「あきちゃん、ごめんなさい」

さつきまで得意げだった直登君が、思い出したみたいにしゅんと肩を落とす。

「いいよ。これで仲直りだね」

頭を撫でて笑ってみせたら、直登君も安心したように表情を緩めた。

「感心しねえな。むやみに魔法を使ってンじゃねえよ」

後ろから、不意に割り込んできた声。

振り返ると、背の高いスーツ姿の男が、眉間に皺を寄せて立っていた。どこかで見たことのあるような背格好だ。それに、この声。

「里中先生はどこだ？」

男が尋ねる先生が、みすずさんのことだと気づくには少しだけタイムラグがある。

だけど、この男こそが、ここに来た初日に私の着替えをのぞいた人物だと気づくにはさほど時間はかからなかった。

「あつ！ あの時の……」

「ん？」

「着替えのぞいた！」

「あ？ あー……あん時のペチャパイか」
「!？」

こういう場合に、赤くなればいいのか青くなればいいのか私からはわからない。

頭の中は、真っ白だった。

堂本と名乗った男は今、みすずさんと一緒に校長室にいる。

私はその部屋の外で、扉にぴったりと片耳を押しつけて待機なう。本当は盗み聞きなんてしたくないけど、男をみすずさんのところに連れて行った時の、みすずさんの表情がどうしても気になって。

どこか諦めと呆れの混じった笑み。いつも明るくて優しいみすずさんの、あんな顔を見たのは初めてだ。

みすずさんに何かあればすぐに私が飛び込んで男をはり倒してやる。そんなつもりで。

「何度来られても、私はやめるつもりはないわよ。あの子たちには居場所が必要だわ」

先に口を開いたのはみすずさん。いつものやさしい声だったけど、頑として譲らない意志が見え隠れする。

「やっぱり考えを変える気はねえか。待っても無駄だったな。ンなことたるうと思ってたけど」

前回来たときも同じような話をしたのかもしれない。堂本はわざとらしく大きな息を吐いた。

「やり方を変えるよ。アンタらを監視化に置かせてもらう。悪く思わないでくれ」

「あら、随分と仰々しいのね」

「アンタはわかってないんだ、先生。事態は昔よりもずっと悪くなってる」

「私が言ってるのはそういう意味じゃないわ。監視だなんて、あな

たは『守って』くれようとしてるんでしょ？」

威勢の良かった男の声が途端に聞こえなくなる。違う。凶星だったから、答えられなかったんだ。

なんか、思ってたのと違うみたい。男がみすずさんに危害を与える心配はなさそうだ。

「あなたは昔からそう。あの人とはやり方が違うだけで、目的は結局一緒なの」

男はまだ口を噤んだまま。

みすずさんの言う、あの人が誰のことなのか、私にはわからなかった。

「この学校が買収されそうになったのを知ってるか」

男は気を取り直して話を変えたようだ。

「まあ……そんなこと一言も……」

「ジジイは言わねえだろうな。俺の周りにも最近きな臭えのがうるうるしてる。しばらく魔法を使わないほうがいい」

みすずさんもその言葉には同意したみたいだった。そこで話がひと段落したのがわかって、私は扉の前からそつと耳を離す。

「あれっあきちゃん何してんだー？」

ああもつ、直登君。タイミング悪すぎ。

シートと人差し指を立てたけど無駄だった。

「盗み聞きとは品がねえな」

扉が開くと同時にそんな言葉が頭上から降ってくる。人のことペチャパイ呼ばわりする人に品をどうこう言われたくない！ けど、盗み聞きは事実だから何も言い返せない。

なんて嫌な奴。

ぐつと唇を噛んで睨みつける。私よりも、先生よりもずっと年上の男の人を。近くで見ると、厳しい両目には年齢を感じさせる皺があった。もしかしたら父親とそう変わらない年齢なのかもしれない。そのくせ偉そうで嫌みな言動はちつとも大人らしくない。

私の視線を無視して脇を通り過ぎ、男は直登君に近づいていく。

そして、その手から木工用ボンドを奪い取った。

「あつ何すんだよー！ 返せよおっさん！」

「没収」

魔法を使わない方がいい。

男の忠告が頭の隅をよぎる。だから彼は直登君から魔法の道具を取り上げたんだろうけど、ボンドを持つ手を直登君の手が届くか届かないかの高さで餌のように掲げる姿はとても大人のすることとは思えなかった。

嫌な奴だ。

けれども男はその後、ここに何度も来るようになる。毎日ではないけれど、三日と開けずに。監視すると言った言葉通りに。

直登君がボンドを取り上げられたように、私もセーラー服を着れなくなった。男に言われたからじゃない。みずずさんと話をして、そう決めたんだ。詳しい事情はわからないけれど、魔法を使わないほうがいいってことはわかった。

そういうことは、今までだってなかったわけじゃない。

この町で、魔法使いがひっそりと暮らすために必要なことなんだって、私は理解してる。

八月に入ると夏が加速する。お盆が近づくにつれ、どことなく落ち着かない気分になった。

だって、お盆がすぎた後の夏休みはもう、終着点まで超特急だ。

夏休みが終わる前に、行ってみようかな。

もう一度、あの場所に。

コウ君に、会いに行ってみようかな。

君がいない夏(4)

暑さで脳がやられるというのは本当だと思う。

少なくともそのときの俺の脳は正常な状態ではなかった。

あきちゃんの幻を見てしまうほどに。

バイト帰り、クーラーを効かせた車の中。強い西日は否応なく目を焼く。こういうときにサングラスをかけられないのは不便だ。あれも眼鏡の一種だから、見えなくてもいいものが見えてしまう。

信号待ちの間に冷房の温度を下げる。それにしても暑い。

アイスでも買って帰るか。

左手に見えたコンビニに心が引かれた。

その視線を少し右にずらしたところに、見えた人影。すぐにコンビニの角を曲がって見えなくなっただけけど、歩くショートカットの少女を確かに見た、気がしたんだ。

あきちゃん。

信号が青に変わる。俺は迷わずコンビニの駐車場に車を入れた。

車を降りて、コンビニの扉の前を素通りすると角を曲がって。

その瞬間、きゃっと小さな声がした。角の向こう側から歩いてきた人とぶつかりそうになって、慌てて足を止める。

「ごめ

「いえ、こっちこそごめんなさ、い……」

謝ろうと相手を見た瞬間、それ以上の言葉が出なくなった。顔を上げた彼女も、同じで。

お互いに次の台詞を探して、変な沈黙が落ちた。先に立ち直った彼女が確認するように俺の名前を呼ぶ。

「吏」

酷く優しい、懐かしい声で。

目眩がした。暑いせいだ。

俺は一度視線を外して、彼女の後ろへと続く道を確認する。そこ

にあきちゃんの姿はなかった。

久しぶり。偶然。元気だった？ うん、俺は元気だよ。じゃあな。

そんな風に当たり障りのない会話だけして、さっさと立ち去ってしまえばよかったんだ。

だけどそんな気軽な会話を交わせるほど俺たちの関係は綺麗さっぱり片づいているとは言い難い。

そう、こうやってテーブルを挟んで向かい合わせに座ることに気まずさを感じるほどに。

時間があるならお茶しない？と誘ってきたのは彼女のほう。強制されたわけでも脅迫されたわけでもない。

断ればよかったのか。

そうできなかったのは、罪悪感のせいだ。

彼女は、男一人では入りにくそうな近くのおしゃれなカフェを選んだ。それもまた俺をどこか憂鬱な気分させる。

だってここは、彼女のテリトリーじゃないか。

「元気そうだね」

飲み物を注文した後で、彼女が唐突に口を開く。

「うん、そっちも変わってないみたいで、」

「変わったよ。髪が伸びたし、体重も落ちたし」

「よかった」と続けようとした俺の言葉を遮るようにして主張する声にはトゲがある、ような気がする。

「髪、結んでるからわかんなかったんだよ」

「前は結べなかったの！」

「そんなこと知らねえよ」

冷たく突き放すように返したら、彼女は黙ってしまった。怒ってる。これは絶対に怒ってる。

でももう、そうやって顔色を伺わなくてもいいはずなんだ。

「……なんか吏一、変わったね」

彼女はテーブルを見つめたままぼつりと呟く。頼んだアイスティーが二つ運ばれてきて、尋ね返すタイミングを逃した。

俺が、変わった？

彼女は勝手に答えを続ける。

「前だったら、ごめんって言って、そうだねって頷いてくれた」
確かにそうだ。

だってそうしないと、彼女は子供みたいに怒って拗ねてしまうから。

「私はそれが嫌だった」

「は……？」

思わず、声に出た。たぶん顔にも出ていた。

なんだそりゃ。

「私の顔色なんか伺わないで、我慢しないで、怒ってほしかった」
彼女は俺のほうを見ずに勝手なことを言う。

意味がわからない。理解できるとも思えない。

いつだって強気で、自己主張が激しくて、わがままで、そのくせ時々見せる弱さが可愛くて、俺はそれにずっと振り回されて。どうしたら彼女が笑ってくれるのかって、ずっと……。

それなのに、なんだよ。

「なんだよ、それ……」

今さらどうしようもない。

一つ、溜め息を吐く。

呆れた。

彼女を責めるつもりで吐いた溜め息じゃない。

彼女の本心を聞き出せなかった自分に呆れてんだ。そりゃ、若干、いや大分、彼女に対して怒りたい部分もあったけれど。

「ごめん」

そんな俺の怒りが伝わったのかもしれない。彼女はストローの袋

を握りしめたまま謝罪する。

「いや、俺も悪いんだろっし」

「だろっつて……悪いって思っていないなら謝ることないじゃない」顔を上げた俺の目の前に、釈然としない憤りを抱えた彼女の顔がある。

これだ。いつも俺たちはこうやって些細な言葉の食い違いで傷つけ合う。

俺は彼女のそんな顔を見たくなくて、傷つけなくて、いつも「そっうだな」で片づけてきた。それが嫌だったって、今さら言うんだもんな。

「じゃあ言うけどな。今さらそんなこと言われても知らねえよ！なんでつき合ってた時に言わなかったんだよ。二年もつき合ってたのに、すっげえ悲しくなるだろ……」

泣いてしまふんじゃないかと思って、恐る恐る顔を上げる。

泣きそうではあったけど、真っ直ぐに俺を見る彼女は微かに笑っていた。

そして何の前置きもなく言う。

「今、好きな子いるでしょう」

質問がストレートすぎて頭の処理が追いつかない。

何がどうやってどうしたらそうなるんだ。女ってわかんねえ。

「いるよ」

嘘をつく必要も隠す必要もないので白状する。

少し緊張感が解けたおかげか、猛烈に喉が乾いていることに気づいた。

自分のアイスティーにストローをさしながら、くっついてきたシロップを彼女の方に押しやる。

「ありがとう」

シロップを二つ投入して、彼女は満足そうに礼を言った。

あれ？

「やっぱりお前も変わったかも」

「え？」

「前は礼なんか言わなかった」

前は、女王様みたいに当然って顔で黙って受け取ってた。

「……嫌な子だね」

もちろん、彼女だって最初からそうだったわけじゃない。

「俺が甘やかしすぎた」

それを聞いて、彼女は肩をすくめて薄く笑った。

年上の彼女のわがままを、俺だけが聞いてやれることが嬉しかったのも本当だったんだ。

もっと早くに怒ればよかったのかもしれない。今さらもう、遅いんだけど。

彼女から別れを切り出された時も、俺はただ黙って受け入れた。彼女が言うなら仕方がない。意志が固くて言ったことは絶対曲げない彼女のことだから、俺が何を言ってもその決意は変わらないだろう。そう決めつけて。

あの時、別れたくないって、まだ好きなんだって、ちゃんと言っておけばよかった。後悔したのは随分と後になってからで。

タイミングを逃した言葉はもう吐き出せない。

あきちゃんに出会って、あの子が先生に告白したのを見届けた瞬間に、やっと消化できた気がした。あきちゃんには悪いけど、俺のできなかったことを代わりにやってもらったのかもしれない。

あきちゃんに後悔してほしくなかったのも本当だけど。

「あなたは、魔法使いですか？」

不意に、彼女が妙な言葉を呟いた。

視線の先には、グラスの下に敷かれたコースターがある。俺も自分のコースターを見てみた。夏らしい青空に、オレンジ色の英字。

Are you a wizard?

「なんか意味があるのか？」

答えを求めない独り言。

その答えは随分と後になってもたらされることになるのだが、そ

の時まで俺はコースターのことなど完全に忘れていたんだ。間拔けな事に。

店を出るころには西日は完全に沈んでいた。家まで送るといふ俺の申し出を彼女は躊躇いなく断る。

「助手席に女乗せちゃダメだよ。好きな子に見られたら誤解されるでしょ」

きっぱりと。

そういう潔さが、好きだった。

なんの期待も持たせずにあっさりと背を向ける彼女の強さが、好きだった。

名前を呼んでみる。

彼女は振り返らない。

それでも俺は、彼女のことを好きだったんだ。

「綾」

もう一度だけ、自分だけに聞こえる小さな声で彼女の名前を呼んだ。

途端に、うるさくなった蝉の声にかき消される。

ああちくしょう。暑いな。

だけど、夏の本番はこれからだ。

まだ八月に入ったばかりで、このときの俺は知らなかった。この先の夏休みがバイトで忙殺されることも、川岸に彼女がいることも、もう一つ、あまり嬉しくはない出会いが待っていることも。

君がいない夏(5)

コウ君に会いに行こう。

そう思っていたのに、その思いはなかなか叶えられなかった。盆踊りの準備に忙しかったんだよ。

準備ってというのは、町内会たちの人たちと一緒にやぐらを組み立てたり、テントを立てたり、荒れ果てたグラウンドの草をむしったり、外の花壇を綺麗にしたり、飾り付けをしたり、そういうこと。

力仕事がメインだから、準備の時だけはセーラー服を着ようと思ってたんだけど、堂本さんとその取り巻きみたいな人たちがたくさんやって来て、重いものを運んだり組み立てたりを全部やってくれた。おかげでセーラー服の出番はなし。

「私、手伝わなくても大丈夫かな」

花壇の手入れをしながら、それでも人手はあつたほうがいいんじゃないかと思つて、一度だけみずさんに聞いてみた。

「いいのよ。あの人は自分がやりたいだけなんだから」

返ってきたのは、どこか突き放すような答え。

「あの人は魔法が嫌いだから、できることなら魔法使いには関わりたいくないって態度で、私がこうやって小学校で魔法使いの子供たちを受け入れているのも嫌がるんだけど、本当は凄く気にしてるの。」

堂本の人に生れた以上は、無視もできないしね」

「魔法が嫌いって……堂本さんは魔法使いじゃないの？」

よくわからない。自分の魔法が嫌いって人は初めてだ。

「魔法使いよ。でも、昔から自分の魔法が嫌いみたい。私は、彼性に合ってると思うんだけどね」

みずさんは忙しくスコップで土を掘りながら、私の問いに答えしてくれる。

魔法使いになるのには、きっかけがある。私の場合は、お姉ちゃんのことを羨ましくて凄く妬ましかつた時期に、お姉ちゃんのをセー

ラー服を着てしまったこと。

魔法使いになるのは一定のストレスが必要なんじゃないかっておジイは言ってた。魔法の道具との巡り合わせもあるけど、魔法が現われるかどうかはその時の心が色濃く反映されるんじゃないかってだから、「魔法」は大抵の場合、使う人にとっても合ってるはずなんだ。

体が弱くて引っ込み思案だった私を変えてくれたセーラー服の魔法。私は、好きだよ。

「どうい魔法？」

「本人に直接聞いてみたら？」

たぶん教えてもらえないだろうなと思ったけど、やっぱりそうだよね。

魔法使いの不文律。

魔法のことを人あまり話さないほうがいい。魔法使い同士でも同じだ。

「あ、でもあきちゃんの魔法のことは知ってるでしょうから、フェアじゃないわね」

「えっなんで知ってるの!？」

「堂本の人間だから、かしら」

「あ、そうか……」

納得、しっちゃった。

堂本家は、月並町の中ではちょっと有名な旧家だ。魔法使いがたくさん生まれているっていう意味で。おジイの名字も堂本だった気がするし、いつもおジイって呼んでるから記憶があやふやだけど、たぶん合ってる、宮司家も元を辿れば堂本の分家に当たる。

「でも、別にいいや」

堂本さんの魔法の秘密を、そこまで知りたいかと問われるとノーだもの。堂本さんって人の神経を逆なでするようなちよっかいの出し方するから、話すと売り言葉に買い言葉で喧嘩になっちゃうし……。つまり、あまり関わりたくないってこと。

「悪い人じゃないのよ」
みずずさんはちよつとだけ肩を竦め、おざなりにフォローめいた言葉を口にした。

祭りの準備に追われていれば、一週間なんてあつという間。

八月十五日 本番の日はすぐにやってきた。

思い思いのお面をつけた人たちがやぐらの周りに円を描いて、音頭に合わせて踊るのがこのお祭りの定番。お面は必ずつけなきゃいけないってわけじゃないんだけど、月並町ではつけない人のほうが少ないみたい。狐や鬼のお面もあるけど、小さい子はアニメキャラクターのお面でカラフルだから見ているだけでもちよつと楽しい。月並小学校の小さなグラウンドが、今夜ばかりはそこそこ多くの人で埋め尽くされる。

私は綺麗になったベンチに座って、ぼうつとそれを見ていた。

仮面ライダーのお面をつけた直登君がおかめのみずずさんに綿菓子をおねだる。その隣で、ドラミちゃんの美佳ちゃんはいつも通り静かだ。

私には、その中に入っていき気がない。準備で疲れてるのもそうなんだけど、セーラー服を着ていないせいで元気が出ないのもそうなんだけど、そうじゃなくて。

「おい、折角の祭りだったのに何やってんだ」

声が頭上から降ってくる。乱暴なその口調も大分聞き慣れてきた。堂本さんだ。

「ちよつと疲れてるだけです」

応える声もぶつきらぼうなものになる。

堂本さんは興味のなさそうな相づちを打った後で、隣に立ったまま私を見下ろして一言。

「孫にも衣装つてヤツだな」

言つと思つたけどね！

そんな挑発にはもう乗りません。ここ数日でわかつたんだ。この人の言動に反応したら負けなんだってこと。

「堂本さんが選んでくれたんですね。ありがとうございます」

無理矢理につこり笑顔を作ってお礼を言つてやる。相手が子供みたいに来るのなら、私が大人の対応を見せてあげる。つて、やつてみたのはいいんだけど。

「やっぱり青で正解だな」

急に満足そうに笑うから、ちょっと困った。

私に似合う色、選んでくれたのかなあつて。もつと、ちゃんとお礼を言わなくちゃいけない気がするじゃない。

「あのっ」

「知ってるか？ 浴衣とか着物は寸胴のほつが似合うんだぜ」

ああもつ。なんでこの人つてこうなの。

前言撤回。

「堂本さんつて絶対独身でしょう！」

こんな人のこと好きになる女の人、いるわけがない。絶対に。

「キスもしたことねえガキがわかつたようなコト言つてンじゃねえよ」

相変わらず嫌みたつぷりだったけど、勢いがなかったから、たぶん私の読みは当たつてる。悔しいことに堂本さんの言ったことも当たつてるから、痛み分けてるところ。

これ以上は泥仕合になる気がして　そうなつたら勝つても負けても気分が悪くなるだけつてわかつてるから　何も言い返せなくなる。

ああもつ。なんだか調子が出ないのはきつと、慣れない浴衣を着てるせい。

正直なことを言つとね、セーラー服以外で女の子の格好をするの、初めてなんだよ。つまり、女装つてこと。

セーラー服は私にとっては戦闘服みたいなもので、だから、気分

的にはこれが初めての女装。

自分でもびっくりした。なんでこんなに恥ずかしいんだろう。セーラー服はちつとも恥ずかしくないのに、女の子の浴衣はとっても恥ずかしい。

どうしてかな。嫌なわけじゃないんだけど。

そういう感情に振り回されたのもあって、着るだけで疲れちゃったんだよ。

あと、この格好でうろろして下手に知り合いに会っても困るしね。たぶん誰も気づかないと思うけど。

月並町は小さな町だけど、当たり前前に誰もがみんな知り合いってほど田舎なわけじゃない。

今夜はこれだけ人がいるんだもん。きっと、大丈夫……

「あ……うそ……」

そうだった。これだけ人がいようと、関係なかった。狭いグラウンドの中で、私はいとも簡単に見つけてしまう。

「せんせ……」

どうしよう。目を離せなくなる。

久しぶりに見る先生。

少し、髪を切った？

どんなに遠くからでも、その横顔は優しい。ってわかってしまう。良すぎる視力がにくい。

違うな、盲目なんだ。

そう思ったら、急に視界がぼやけた。なのにまだ、先生を追い続けてしまう。

「どうした？」

急に黙ってしまった私に、堂本さんが怪訝な目を向けてくる。だけど私は、それにかまってられなかった。悪いけど。

先生が好き。まだ、大好き。

諦められるって、忘れられるって、どうして思ったりしたんだろう。そんな、簡単な気持ちじゃないんだよ。

私は私なりに、真剣だったんだよ。本気だったんだよ。最初から叶わないってわかってた。それでも好きになった人だった。

気がついたら、目が追ってた。どうしようもなかった。そうだよ。

失恋してすぐに諦めがつくようなハンパな思いで、好きになれる相手じゃない。

後から後から溢れてくる涙を止める術を知らなくて、浴衣の袖で拭う。ごめんなさい。

堂本さんは、気づいちゃったのかもしれない。

私の視線の先にいる人に。

遠くから顔を見るだけで辛いのに、どこかで、会えて嬉しいって思ってる私がいるのも事実なんだ。

前は嬉しいばかりだったんだよ。なのに、今は苦しいよ。

前は一日中見続けてても飽きなかったんだよ。なのに、今は見続けることが苦しいよ。

だけどまだ目が追っちゃうんだ。自分の意志とは関係ないところで。

まだ先生を見ていたい。

もう先生を見たくない。

どっちも本当で、どっちを選んでも苦しいんだったら

「……？」

揺れていた視界が、不意に真つ暗になる。

なに、これ。お面？

堂本さんが、私の顔を隠すみたいにして、お面をつけてくれたんだってわかるのにちよつと時間がかかった。

お面に開いた二つの覗き穴から見える世界は、小さく丸い。ぐつと狭くなつた視界の中にはもう、先生の姿は見当たらなかった。

「みつともねえツラ見せんな」

堂本さんは相変わらず酷い言い様。そのくせ頭の上に置かれた手

は温かくて、困る。

なんにも言い返せなかった。喉の奥が苦しくて。まだ、ダメなんだ。

いつになったら、ダメじゃなくなるんだろう。

コウ君は言ってた。

いつか必ずそういう時が来るって。

今日でも明日でもいい。早くきてほしい。

前は、先生のことを考えるだけで楽しくて、一目姿を見るだけで一日中幸せだった。それなのに今は、苦しいよ。

好きな人のことを考えて苦しくなるのは、悲しいよ。

お面の下からぼたぼた落ちた滴が浴衣に染みを作る。せつかくのかわいい浴衣なのに。台無しだ。ごめんなさい。

だけどうすることもできない私の膝の上に、ふわりとハンカチが落ちてくる。

堂本さんって本当は意外と、優しい……のかな。

「あ、ありがとう……ごじゃ……ず……」

「鼻水だらだらで何言ってるのかわかんねえよ、きつたねえな」

「!? ざつぎばで、やざじがったのに……っ」

やっぱり前言撤回。口が悪いのも性格悪いのも変わってない。

「ごちゃごちゃうるせえな、気が向いただけだ」

「うー……あ、あしだは霽でも降るんじゃないですか」

悔しいから、鼻声でみっともないけど言い返してやる。

「降らねえよ。明日は台風だ」

堂本さんはやけにきっぱりと言いつつ切った。

予言というより断言。

変なの。台風がきてるなんて話、誰もしてなかった。

今日の時点では。

状況が変わったのは、大分時間が経ってから。

祭りが終わって、片付けでくたくたになった私が寝こけていたころ。

「これ、飛ばされちゃうかもしれないから、中に持って入ろうか」
美佳ちゃんは躊躇ってるみたいだった。黙ったまま棒立ちで、両手の拳をぎゅっと握ったまま動かない。

「どうしたの？」

麦わら帽子のつばで隠れた顔をのぞき込む。今にも泣きそうに唇を噛みしめて、どうしたらいいのかわからないって顔をした。

え、え、どうしよう。具合でも悪いのかな。私が何か悪いことをしちゃったのかな。

どうしたらいいのかわからないのは私も一緒で。おろおろするし
なくなつて。

「あつ………！」

一際強い風が吹いて、美佳ちゃんの麦わら帽子をさらってしまふ。
美佳ちゃんの長い髪と一緒に舞い上がって、その向こう側に、麦わら帽子をナイスキヤツチした背の高い男の姿が見えた。

「小学生いじめんなよ」

昨日の今日で、どんな顔をしたらいいのかわからない。

でも、堂本さんの態度は相変わらずで。

「いじめてない！」

堂本さんは私をいつも通りにからかっから、美佳ちゃんの頭の上に麦わら帽子を乗せる。

「ほら、しっかりかぶっとけ」

美佳ちゃんは頷く。帽子の下で、小さく、ありがとっつて口が動いたのが分かった。

しかも、美佳ちゃんは堂本さんの手にそつと触れる。それに気づいた堂本さんは、美佳ちゃんの小さな手をしっかりと握った。

すつごく、すつごく不思議なんだけど、美佳ちゃんは堂本さんには懐いてるんだ。下手したらみすずさんよりも堂本さんと一緒にいるときのほうが嬉しそうだ。本当に、不思議。

「台風来るぞ」

「知ってます。だから片づけしてるんだって」

つい、冷たく返してしまうけど、今はもうなんとなく私にもわかってるんだ。堂本さんが、何のためにここに來てるのか。

たぶん、この人は心配して來てくれてる。

一体何がそんなに心配なのかはわかんないけどね。

「あの、昨日はありがとうございました。ハンカチ、洗って返します」

「鼻水だらけのハンカチなんかいらねえよ」

「だから洗って返すって……！」

素直にお礼を言ったのに、ああ言うからこう言っちゃう。せつかく堂本さんのこと見直したのにな。とか言ったらまた「誰も頼んでねえよ」とか憎まれ口を叩くのだろうか。この人は。

話を換えよう。

「堂本さんの魔法って、天気がわかるんですか？」

ふつと湧き起こったのは 自分でも不思議だけど そんな問い。
べつに聞かなくてもいいやって思ってたんだけどな。こうなった

らなんだか気になっちゃうじゃない？

堂本さんはあからさまに嫌そうな顔をしていた。なんでそんなこと聞くんだったって感じの。

「私の魔法、知ってるんですよ。だったら、私に堂本さんの魔法教えてくれてもいいじゃないですか」

「知ってどうすんだ」

「どつって……」

「利用すんのか？」

いつもの嫌味な声とは少し違う。剣を含む、低い声。美佳ちゃんが不安そうな顔で堂本さんを見上げる。

『魔法が嫌いだから』 みすずさんの言葉を思い出す。

触れられたくないのかもしれない。だけど、今さら引きさがるのも癪で。利用するなんて考えてもなかったんだけど、

「……天気がわかるのは便利そうだから使えたらいいかもしれませ

んけど」

首を傾げながら言ってみたら、堂本さんは深々と長い溜息を吐いた。何なの。

「お前みてえなアホなガキにんな頭回るわけねーか」

「もうっ、いいです！」

そうやってすぐ馬鹿にするから、嫌いなの。優しくない。『先生と違う』を奥の方に押しこめる。

「昔、母親に言われなかったか？ 学校行く前に、『今日は雨が降るから傘を持って行きなさい』って」

「へ？」

堂本さんが急に口を開くから、私は一瞬何を言われたのか理解できなかつた。

「天気がわかるのは俺の母だ」

「へー……」

「雨が降る。中入れ」

促された途端に、鼻の頭に雨粒が一つ落ちてくる。

結局、五本あった筈のうち四本を堂本さんが持ってくれて、私は一本だけ抱えて校舎の中に戻った。

やがて、雨が降り始める。堂本さんは忙しいみたいで、雨足が強くなる少し前に帰った。

聞きそびれちゃったな。

天気魔法じゃないとしたら、堂本さんは一体何の魔法使いなのか。

「堂本さんって、何してる人なの？」

教室の窓を打つ雨音を聞きながら、なんだか宿題に集中できなかつた私は世間話みたいに聞いてみる。べつに、堂本さんに特別な興味を持ったわけじゃない。

尋ねた相手はもちろんみすずさん。美佳ちゃんは図書室に行くつて出て行ったし、直登君は集中力を切らしてどこかに行ってしまったから、今、教室の中は私とみすずさんの二人だけだ。

「社長さんよ」

「えっ！？ そんなに偉い人なの？」

「そうねえ……昔から頭の回転は早いし、勉強もできた子だったし、とっても努力家ね」

なんだか不思議な感じ。私の想像する社長はもっと年をとっていて、落ち着いていて、社員が困ってたら助けてくれるような人なんじゃないの？

それとも、社長だから偉そうなのかな。あの性格は元からのような気もするけど……。

「いつから知り合いなの？」

「あら、言っただけだったかしら。昔ね、私をもっともっと若かったころ、あの子の先生だったのよ」

「先生？」

「そう、担任の先生」

先生。

また、だ。

まだ思い出す。

喉の奥のほうに苦しい。吐き出してしまいたくなる。

「みすずさんは先生だったころ、生徒に告白されたこと、ある……？」

傷をえぐるようだった。みすずさんが驚いたような顔で私のほうを見る。たぶん、私はひどく切羽詰まった顔をしてたんだと思う。

「……あつたわねえ」

遠くを見るような目でみすずさんは言った。昔を懐かしむように。

「どう、思った……？」

怖い。でも、聞いておきたい。聞いておかなきゃ。

「そうね……嬉しかった、かな？」

目元に笑い皺を作ったみすずさんが、少女のようにかわいらしく首を傾げる。

「先生ってね、生徒にとっては、親の次に身近な大人でしょう。だ

から、生徒の前ではきちんとした大人でいたいといけない。だけど、まだ若かった私にはそれが難しく、しんどかった。そういう時に、頑張ってる先生が好きって言うてくれた子がいて、励まされちゃったのよね」

「返事は！？　なんて返事したのっ？」

「ありがとっつて。先生は、君たち生徒のためにこれからも頑張るから」

同じだ。

「やっぱり、ダメなんだ……好き、なのに」

顔を見られたくなくて、机に突っ伏す。小学校の机は低すぎて、丸めた背中が痛かった。

「あきちゃんの先生は、幸せね」

頭の上に、温かい手のひらの感触。

「気持ちに答えられなくても、先生はきつと忘れないわ。本当はいけないことだけど、そういう風に言うてくれた生徒のことはやっぱり特別になっちゃうのね。ずっと、忘れられなくなるの。その生徒が卒業して何年も経っても、自分が結婚して子供ができて、先生を辞めても、ずっとね」

「私、しんどの。先生のこと好きなのに、それだけで幸せだったのに、辛い。諦めたいの……でも、顔を見たらだめで……もう、好きでいたらダメなのに……諦めなくちゃいけないのに……」

早く忘れなきゃ。早く。先生を好きなこと、やめなきゃ。

「ダメじゃないわ。そんな風に否定したら、しんどいでしょ」

「え……？」

「無理に諦めなくてもいいの。大丈夫。ちゃんと、諦めがつくときが来るからね。……たまに諦めきれないときもあるけど、こればかりはどうしようもないのよ」

「ええ……？」

みずずさんは意味深なことを言ったけど、それ以上は何も言わなかった。

でも、そっか。無理に諦めなくてもいいんだ。

ゆっくりと顔を上げる。たぶん、酷い顔をしてるから、乱れた髪を整えるフリをして髪を留めていたピンを外す。長い前髪で顔を隠すようにしたら、いつもの視界が戻ってきて、ちよつと安心する。ああ、そっか。夏休みに入ってからずっと「あきちゃん」だったから。盆踊りのときに先生を見つけたのも、きつと見えすぎてたからなんだ。

しばらくこれで過ごそうかな、なんて思った時だ。

「やめるよっ！！」

玄関のほうから、悲鳴に近い声がした。直登君だ。

みずさんが素早く立ち上がる。私も後を追って教室を飛び出してる。

「どうしたの……美佳ちゃん!？」

靴箱の前で呆然としている直登君。その視線の先には、美佳ちゃんがいる。

昇降口に並べて置いていた箒を手を持った美佳ちゃんが。彼女の足下には、不自然に折れ曲がった箒が散らばっていた。

最後の一本も同じように壊そうと、美佳ちゃんは箒を床に打ち下ろす。雨と風の音が酷くて気づかなかったけど、力一杯に叩きつけられた箒は激しく痛々しい音を鳴らしていた。

「美佳ちゃん、やめよう。もう、やめよう」

みずさんが止めに入って、その手からやさしく箒を取り上げる。美佳ちゃんは普段の様子からは想像できないくらいに息を荒くして、箒を取り上げられた途端に泣き出してしまふ。雨よりも激しく、悲しい泣き声が校舎の中に響く。

「あいつ、いじめられてんだ」

直登君が、誰に言うわけでもなく呟いたのが聞こえたけど、私にはどうすることもできなかった。

お盆が終わってしまえば、夏休みはもうあと少し。

「これ、川で冷やしてきてくれる？」

そう言ってみずさんに託されたのは、大きなスイカ。

川って、あの川だ。

結局あれから、あの場所には行ってない。

また会いたいな、あきちゃん。

コウ君のことを思い出すと、あの時言われた言葉が勝手に出てきて、うわーっうわーっ！

慣れてないんだよ、こういうの。

変に意識しちゃって、盆踊りの準備や先生のことや台風や美佳ちゃんのこともあってごちゃごちゃしちゃって、行くタイミングを逃したフリをした。

ま、行っただっていいかもしれないしね。なんて期待と不安が混じったまま、重たいスイカを持って汗だくになりながらたどり着いた川には、涼しい顔をしたコウ君がいた。

振り返った顔にびくっとする。ドキッじゃないよ。たぶん。近いけど。

「あーやっとな来た。久しぶり。会いに来てくれたの？」

「え、ちがっ……スイカ、冷やしにきたの！」

手に持った、破けそうなくらいにパンパンに膨らんだビニール袋を主張したら、コウ君は大笑い。

「マジで？ 川で冷やすの？」

「そうよ。冷蔵庫よりも早いしすぐごくよく冷えるんだから！」

あと、大きすぎて学校の冷蔵庫に入らないっていう理由もあるんだけどね。

「コウ君はまた写真撮りにきたの？」

「そうだよ」

「何撮ってるの？」

「水とか、花とか、でも人を撮るのが一番好きだ」

「こんなところ、人いないじゃない」

話をしながら、サンダルを脱いで川の中に入ると抱えていたスイカをビニール袋ごと浸けておく。持ち手のところを石で押さえて、これでよし。

「うん。だからあきちゃんを待ってた」

「え……!？」

振り返った拍子に、不意打ちのシャッター音。

「もう、なんで撮るの!」

「いいじゃん。かわいいよ。この間の泣き顔も良かったけど」

「消して! 今すぐ消して!」

でもコウ君は、嫌だよって笑うだけ。先生にフラれてからいろんな人の前で泣いちゃったけど、記憶に残るのと写真で残るのは全然違う。

うう、嫌だな。

「それで、先生のことは吹っ切れそう?」

コウ君はいきなり確信を突いてくる。川に足を浸けたまま、コウ君の座る石の隣に腰掛けて、私は首を横に振った。

「無理に諦めようとしたらしんどかったから、やめた」

状況は何も変わってない。これからも、先生に思いが届くことはない。だけど、私の心はずっと軽くなっていた。諦めなくちゃって思ってた頃よりはずっと。

「そのうち、自然と諦められればいいかなって。それまでは、好きでいてもいいかなって」

それがいつになるのかわからないけど。

隣を見たら、思いのほか近くに、穏やかな目をしたコウ君の顔があって、少しびっくりする。

「辛い思いをせずに、自然に諦められる方法ならあるよ」

「え?」

急に真剣味を帯びたコウ君の顔がもっと近づいて、

「あきちゃん、俺と付き合わない?」

「……え、ええ!？」

今なんて言ったの? この人。

「失恋の痛手を忘れるには新しい恋が一番ってね」

「え、ちよ、つちよ……! ま、待って!」

距離の近いコウ君の肩を押し返すように手を突き出して、ストツプをかける。

混乱中だから!

落ち着け私。

コウ君はちゃんと待っていてくれる。

「だって、まだ会うの2回目!」

「そうだけど、あきちゃん可愛いし、好きだよ」
「うわーっうわーっ。」

そんな、ストレートに言っちゃうの!?

たぶん今の私、顔、真っ赤だ。

「キスしていい?」

コウ君があまりにもさらりと言うもんだから、私は何も答えられなかった。キスって、キス?

顔、近い近い近い!

ぶんぶんぶんぶん。全力で首を横に振ってしまったら、急にコウ君が噴き出すように笑いだして、

「あはは、ごめん。冗談だよ」

あっさりと白状した。

なんてこと……。

「か、からかわないで!」

これは怒ってもいいよね。乙女心を弄びやがって!

「本気だったら良かった?」

コウ君は、心の奥をのぞき込むような問いを投げってくる。そんなものへの対処方法を私は知らない。

「ごめん。そんな顔しないでよ。あきちゃんのこと可愛いと思ったのは本当だから。正式にお願いしてもいいかな。被写体になってく

れる？」

「へ？」

これまた突然の申し出にびっくりする。正式って、そっちね。

「高校最後の写真展に出す作品なんだ。でもなかなか撮りたいと思うものがなくて、困ってた。やっと見つけたんだ。どうしても、あきちゃんを撮りたい」

不意に立ち上がったコウ君が勢いよく頭を下げた。

本気、なんだ。

「一度だけでいい。もう一度、会って写真を撮らせてくれたら、もう何もしない。……好きになってたら、分からないけど」

う…………。

そんなこと言われたら、協力してもいいって言いにくいじゃない。だって、まるで期待してるみたいで。

まだ、心臓がどきどきゆってる。これは恋じゃない。びっくりしてるだけだ。

告白されるのなんて、初めてだったんだから。

「お願いします」

顔を上げたコウ君が、最後のため押しみたいに真剣な目を向けてくる。

私、こういう目には弱いんだよ。

「一回、だけだったら」

「本当に？　ありがとう！　絶対可愛くする。約束する。あと、制服を着てきてくれる？」

「えっ!？」

何それ聞いてない。

「高校最後だから、そういうコンセプトなんだ。あきちゃんも高校生だろう？」

「そ、そうだけど…………」

「どこ高校？」

「月高…………」

「あそこセーラー服じゃん。ラッキー！」

すっごい嬉しそうなコウ君を見てたら今さら無理だなんて言えなくて、結局押し切られる形で被写体になる約束をした。

三日後の同じ時間に、またここで、と。

どうしよう。

セーラー服を着ないといけない。

でも、着ないって決めたんだ。みずさんと。ここにいる間は。

「アキちゃんのセーラー服、見たいな」

コウ君は言ってくれた。

私だって、セーラー服を着たいし、そんな風に言われたらちよつとだけ見せたくなるじゃない。

そんなことをぐるぐる考えてながら帰っていたら、一つ重大な忘れ物をしたことに校舎に戻ってから気づいた。

「あれーあきちゃんスイカはー？」

待ちくたびれた様子の直登君が真っ先に声を上げて、

「あ！……置いてきちゃった」

スイカはまだ川の中。取りに戻ったスイカはよく冷えていて、とっても美味しかったけどね。

君がいない夏(6)

俺の夏休み前半は結局、ほぼバイトで消えた。

これでいいのか、新沼吏一。いやよくねえだろ。

幸いにも、もうすぐ八月が終わる。高校生の夏休みが、終わる。

つまり何が言いたいかってーと、あきちゃんが帰ってくる。

この味気ない生活にもようやくうるおいが戻ってくるわけだ。自慢にもならないが、ここ数週間の俺の規則正しい生活っぷりはどこかのジイさん並みだ。

飲み会もない。夜出歩くこともない。デートの約束もない。バイト先と家とを車で往復するだけの毎日。変化といえばたまにコンビニに寄ってマンガを立ち読みするくらいで。

さすがに身体がなまってきたので朝の涼しい時間帯のランニングを日課にした。まったく、健全すぎて嫌になる。

これだけ健康生活を続けてると、溜まるもんも溜まなくなるもんだ。

もともと筋トレなんかは毎日やってるけど、くたくたになるまで身体をいじめてやれば頭で余計なこと考えずに済む。

いつものコース。いつものスピード。いつもより少しだけ気温の低い朝。秋が近づいている、と言うにはまだ残暑の存在感が強すぎる。

そついう日だった。あいつに出会ったのは。

見慣れた道に、見慣れない看板。

どこにもある住宅街の中で、その店構えはよく目立った。両脇に並ぶのが旧家だったからかもしれない。鮮やかな緑の吊り看板に金の横文字は、この古い田舎町では浮いてしまう。

なんでこんなところに？

思わず、店の前で足を止めた。

白壁に、これまたシャレた木のドアには「本日オープン」の張り

紙がある。

それにしても……毎日走ってたのに、気づかなかった。不思議だ。

しかしこの町の中では、こういう不思議なことがわりとよくある。深く考えないほうがいい。

でも、なんか、気になるんだよな。

そうだ。

もともとここには何があった？

子供の頃、遊び場に使っていた空き地だったはず。

唐突に思い出した。

そうだ。おばけの木が。

ぼーっとして見ていた木の扉が急に開いて、身構える。出てきた男と目が合ってしまったって、妙に気まずい。こんな早朝に、何事かと相手も思ったのだろう。

沈黙が落ちる。一拍置いた後、男はともすれば人相の悪くなりそうな細い目をさらに細くして、思いのほか人好きのする笑みを浮かべた。

「いらっしやいませ？」

「いやっ俺は……」

「ああ、大丈夫。さすがにこんな早くから店を開ける気はないから」とっさに上手い言葉が出てこなかった俺に、男は気安い調子で話を合わせてくる。

歳は俺よりも十近く上だろうか。だけど、くだけた口調は若さを感じさせる。柄の入ったシャツに細身のジーパンというラフな格好も、その辺のサラリーマンと比べれば、男の容姿をある程度、若く見せているんじゃないかと思った。

「ここ、でかい木がありませんでした？」

男のフランクな態度につられるように、気になっていたことを尋ねてみる。

「ああ、柿の木？ あれなら庭に残してあるよ。見るかい？」

「え、いやそこまでは別に、いいです」

「べつにかまやしないさ。君は、あの木の秘密を知ってるのか？」

まるで既知の友人を誘うみたいに、男は自然に中へと招き入れる。店の中には、ずらっとありとあらゆる形状の椅子が、ところ狭しと並べられていた。家具屋なのかと思っただが、違う。ここにあるのは椅子だけだ。タワーみたいに積み上げられたやつもあれば、天井からぶらさがってるものもあった。

「……知ってるっつーか、あれですよ。夏なのに実ができる」
店内を見回しながら、問いに答える。

秘密というほどのものだろうか。確かに、不思議ではあるが。

本来なら秋に生るはずの柿が、まだ日差しの暑い夏のうちに、おいしそうな濃いオレンジに色づくのだから。

子供の頃からそれを見てきた俺は、柿が夏の果物だとずっと思い込んでいた。いつだったかリュウさんにバカにされた覚えがある。

「そう。もう、生ってる」

店の奥側は、明るい日差しが入り込む一面のガラス窓。その向こう側に、老獪な枝ぶりの柿の木が見えた。確かに、実はすでに鮮やかに色づいている。

男は窓を開けて庭に出る。どこからか脚立を出してきて足場にすると、高いところに生っていた柿を一つもぎ取って戻ってきた。

「よかったらどうぞ」

「あ、どうも」

小振りな柿を受け取る。走って熱くなった自分の手のひらの中で、それはひやりと冷たい。

「まだ少し堅いけど、皮が薄いからそのままでもいけるよ」

じいっと柿を見つめていた俺に、男がすすめる。喉も乾いてるし、それじゃあ有り難く。

「いただきます」

その場をかぶりついて、

「……う」

口の中に入れた瞬間、広がる渋味。思わず地面に吐き出したが、舌に残る嫌な感じは消えない。

渋柿じゃねえか！

口の中の不快感と戦う俺の目の前で、さっきまで営業スマイルを浮かべていた男は一転して悪魔の笑みを見せて、

「渋柿だつてことは知らなかったのかい？」

コノヤロウ、白々と！

「知ってたら食わねえだろ！」

「そりゃそうか。ま、待つてな。お詫びに冷たいお茶でも入れてくるから」

親切なのか何なのか、男は一度店に入って右手に引っ込むと、やがて盆にグラスを乗せて戻ってくる。

間仕切りの一角に手招きされて行くと、小上がりの小さな畳間があった。突然に和の雰囲気醸し出すテーブルと座布団に、違和感を覚える。変な店。

ここは椅子じゃねえのか。

テーブルに麦茶の入ったグラスを置いた男は、どうぞ、と愛想の良く笑う。まさか渋いお茶じゃねえだろうな。

靴を脱ぐのが面倒だったので、端っこに腰掛けてグラスに手を伸ばす。早くこの渋味をなんとかしたくて、冷たい麦茶を一気に半分ほど喉に流し込んだ。良かった、普通の麦茶だ。

「あーくそ。ひでえ目に合った」

「悪かったな。あの木を知ってる人に会えたのが嬉しくて、つい」

「ついって、なあ！」

「つい、で人に渋柿を食わすのか。」

「まさか本当に食べるとは思わなかった」

肩をすくめて言われると、食べた俺の方がバカだったみたいじゃねえか。確かに、思い出してみればガキのころにも一回食べてみて同じ経験をした覚えがあるので学習をしてない点ではバカかもしれない。

「この辺に住んでるのかい？」

「ああ、すぐ近く……そつちは？ わざわざこんなところに店構えるために引越してきたんだ？」

酷い仕打ちを受けた分、口調も遠慮のないものになる。

「静かでいいところじゃないか。俺は出戻りなんだ。昔、この町に住んでた」

「へえ、この辺……？ じゃねえな。近所だったら知ってるだろうし」

「うん、前住んでたのはもっと山手。名前は？ 俺は多聞たもんだ。青柳あおや多聞たもん」

「た、もん？」

「そう、多くを聞くと書いて、多聞。よろしく」

「珍しい名前だな。俺は新沼吏一」

それほど変わった名前なら、子供の頃に一度でも聞いたことがあるはずだ。……いや、正直あの当時の自分の記憶力ほど当てにならないものはないけれど。

「新沼……」

その名前に聞き覚えがあるのか、多聞が何かを思い出すように視線を遠くに向ける。糸のように細い目が途端に鋭さを増す。

しかししばらくすると何事もなかったかのように再び弓なりに微笑んだ目を向けて、

「また、いつでも遊びに来なよ。帰ってきたばかりで知り合いななくて暇なんだ」

気安く誘う。

「おう。渋柿はもういらねえけどな。ごちそうさま」

空になったグラスをテーブルに返そうとして、ふと、そこに敷いてあったコースターに気づく。

店にありそうな紙製のコースターだ。つか、すげえ見覚えがあると思ったら、これって……。

「うちの店で使ってるやつと同じだ」

青空に浮かぶ雲のイラスト。オレンジのアルファベット。描かれている文面は

「Are you a wizard？」

流暢すぎて、なんて言ったのかすぐには聞き取れなかった。

俺の視線の先を追って、多聞がコースターに書かれた英文を読んだんだ。

「カフェでもらったんだ」

たぶん、そのカフェは俺のバイト先の店のことではない。

今や月並町のあっちこっちの店がこのコースターを使っているらしい。川岸が言うには。

「町おこしだよ」

俺はそんなもんには興味がなかったから深くは聞かなかったけど、それにしても、この文面はなんだ？

メッセージに意味はないのかもしれない。

だとしても、なんだか気持ち悪い偶然だった。

俺の夏の物語はこれで終わりだ。

バイト、元カノとの再会、変な椅子屋との出会い。なんだこの面白くない夏は。

のん気なもんだと呆れるだろう。あきちゃんに近づく男の存在も、魔法使いに迫る危険も、全く知らずに。

ああそうさ。また蚊帳の外だよ。

だけど思い返せば俺は、この時もっと味わっておくべきだったんだ。蚊帳の外にいられる幸せってやつを。

君がいない夏(7)

英語は終わった。現国も。化学と数学はもう少し。あとは日本史が残ってる。だってプリント広げるたびに先生のこと思い出すんだもん。

夏休みももう終盤。宿題の追い込みに入らないといけないのに。成績は悪くないよ。特別良いわけでもないけど、授業とテスト前の勉強をちゃんとやってるから、大丈夫。セーラー服を着て勉強すると集中力もアップするしね。

夏休み中はそれができなかったのはちょっと辛かったけど、だからって宿題ができないほどじゃない。

隣の直登君もやっぱり同じように、夏休み帳の最後の数ページに挑んでいる。

そつえば、美佳ちゃんは……？

みずずさんもいない。

あの台風の日の後、美佳ちゃんはずっと喋らない。もともと口数の多い子ではないけど。

チャイムの音が鳴る。

宿題の時間は終わり。

直登君が待つてましたとばかりに教室を飛び出して行く。このあとは、直登君がテレビゲームをしてもいい時間だ。

私は、いつもなら本を読んだり直登君と一緒にゲームしたりするんだけど、今日は約束の日だから。

久しぶりのセーラー服。襟を整えて、スカーフを緩めに結ぶ。背筋が伸びて気持ちがいっきとすする。夏ばて気味でだるかった体が嘘みたいに軽くなる。

鏡の前でくるっと一回転。スカートがひらりと舞って、気分も上がった。

「よし！」

みずずさんたちに見つからないように、そつと校舎から出る。大丈夫かな。見つかってないかな。

校舎をちよつとだけ振り返ったら、二階の廊下の窓のところに、小さな人影が見えた。あれ、美佳ちゃん？

なんであんなところに。

あ、こつちに気づかれた。

みずずさんに言っちゃうかな。お願い、黙つてて。人差し指を口元に立てて内緒の合図。

美佳ちゃんがどう受け取ったかはわからないけど、私はくるりと背を向けて裏手の森に入っていく。

セーラー服の足取りはとっても軽い。スカートを木に引っかけないようにそれだけ注意して、私は小走りに川を目指す。心臓がドキドキしてる。悔しいけど、認めたくないけど、すごく、ドキドキしてる。

そつか。私、コウ君に会うのが楽しみなんだ。コウ君は、『あきちゃん』として私がおえる、数少ない同じ年頃の男の子。魔法使いだったことも、学校も抜きにして、話ができる男の子。今までにはいなかった。だからきつと、気になっちゃうんだ。

約束の川辺まであともう少し。つてところで、

「おい、んな格好で何してんだ！」

呼び止める大きな声。

びっくりして足を止めた。

「堂本さん……」

「どこ行く気だ？」

怖い顔して、大股に歩いて距離を詰めてくる。

「……あなたには関係ないです」

「話聞いてたんじゃないのか？ 勝手なコトされるとこつちも困るんだよ」

話つて、堂本さんとみずずさんが話してたこと？

魔法を使わない方がいいって。

「でもっ」

どうして使っちゃいけないのかを聞いたわけじゃない。だから、そんなに怒るほどダメなことだとは思わなかった。

「でもじゃねえ！ 帰るぞ。早くソレ脱げ」

「えっ！？ うわっ 離し……！」

堂本さんが強引に私の腕を引っ張る。強い。セーラー服を着てるのに、振りほどけない。

「離してって！」

「ウルセーな……」

私は踏ん張って耐えてみるけど、堂本さんのほうが力は上だった。なんなのこの人！ おじさんのくせに！

ダメだ。引きずられる。

その時、パチリと乾いた音がした。

シャッター音？

「誰だ！？」

私の斜め後ろで草葉が音を立てる。逃げる足音。その方角に、堂本さんが怒鳴った。捕まれていた腕の力が緩む。その隙に、私は走った。

あの方角には、川がある。コウ君との約束の場所が。嫌な感じだ。

立ち並ぶ木をぬって、逃げる黒いスーツの後ろ姿を捉える。

「おい！ 深追いすんな！」

後ろから堂本さんの声がした。

大丈夫。追いつける。

だって、セーラー服を着てるんだもの。

あと数メートル。逃げる男の上着を掴まえる。男はあっさりと袖を引き抜いて、夏に着るには暑そうな黒スーツの重たい上着を捨てた。

「わっ！？」

捉えたと思って失速した私は、またわずかに引き離される。

それなら

再び追いついて、今度は間髪入れずに足を振り上げた。直前で気づいたスーツの男が振り返る。顔を拝んでやろうと、キックを繰り出しながら注視する。だけど私の目に映ったのは、

「えっ？」

狐！？ の、お面？

男の顔に張り付いた、糸のように目の細い狐の面。盆踊りでよく使ってるやつだ。

お面に気を取られたせいで、私の蹴りは男の下顎辺りをかろうじて掠めただけで、空を切った。

着地で体勢を崩す。ああもう！ すぐに立ち上がるうとしたところで、男の手元で何かが光った。反射的に目を閉じる。男が手に持っていたインスタントカメラのフラッシュだと気づいた頃にはもう、男との距離は大分空いていて。

このまま道路に出られたら 車を用意されてたら。

「大丈夫か？」

「平気です！」

追いついてきた堂本さんと言葉を交わす。その時だ。

すぐにまた走りだそうとした私の横を、一瞬だけ、ものすごく強い風が通り抜けた。

風、じゃない。

「ええっ!？」

箒？ と、

「……美佳ちゃん？」

空飛ぶ箒と、それにまたがる少女はあつと言う間に男に追いついて、男の手からカメラを奪い取る。きつと、男も油断していたんだ。美佳ちゃんがその隙を上手く突いた。

にしても、箒で空を飛ぶなんて

「すごい……魔法使い、みたい……」

「みたい、じゃねえだろ。つたく、美佳までホイホイ魔法使いやが

って」

堂本さんは、本当に怒ってるみたいだった。口調はいつもどおりだけど、怖い顔。

「あぶねーだろ！」

すぐにUターンして戻ってきた美佳ちゃんを、堂本さんは一喝する。そんな怒鳴らなくても……ほら、美佳ちゃんも泣きそうになってる。

でも、すぐに頭にぼんって手を乗せて、

「ありがとうな。でも無茶すんな」

びつくりするくらい優しい顔で笑う。

「待ってる、様子見てくる」

「私も行く！」

「ダメだ。ガキはすっこんでろ」

主張してみたけど、あつさり却下。堂本さんは私と美佳ちゃんを残して男を追った。この先は急斜面の下りになっていて、車の通れるアスファルトの道路まで道が続いている。

というか、あの狐面の男はどうして私たちの写真なんか。

魔法使いだから？ でも、私の写真なんか撮ったってどうしようもないはずだ。私はただの高校生。大体、あの場所からだったら私なんて後ろ姿しか写ってない。

あれ？

じゃあ、何を撮りたかったんだろう。

答えにたどり着いて、背中がぞくつとした。

「写されたのは、たぶん、私じゃない。」

「……堂本さんだ。美佳ちゃん、一人で校舎に戻れる？ みすずさんにさっきのこと話してくれる？」

「あき、ちゃんは……？」

美佳ちゃんが初めて私の名前を呼んでくれた。

「私は堂本さんを助けに行く」

美佳ちゃんは堂本さんのことが好きだから、それを聞いて素直に

頷いた。

よし、全力ダッシュだ。

この森は小さい頃からずっと私の遊び場なんだから。お姉ちゃんと一緒に日が暮れるまで隠れん坊したり、川でスイカを冷やしたり、カブトムシを捕まえたり。迷子にだって何回もなってる。だから、よく知ってるんだよ。

道路まで出る山道は一本じゃない。獣道をショートカットすれば、ほら、すぐにアスファルトが見える。

道路に立っている堂本さんの姿を確認する。見失っちゃったのかな。

緩やかに下る道の先には急なカーブがある。カーブミラーには、男の姿はなかった。

あっさり逃げてくれたなら、そんなに心配する必要もなかったのかなって、思った時だった。

山の道にはカーブがたくさんあって、それは上り方向も同じだったんだ。男は、たぶんその曲がった先に車を止めていたんだと思う。急にカーブから飛び出してきた車は一直線に坂道を下る。堂本さんのほうに。

セーラー服を着た私の体が、勝手に動く。

山の斜面を利用して、飛ぶ。

宙を駆けるようにして、堂本さんの体に思いつきり体当たり。

道路から押しだされるようにしてガードレールのところにはぶつかった堂本さんが、私を見て口を開く。「危ない」と言ったのかもしれない。だって、私がいる場所は、ちょうどさっきまで堂本さんが立っていた場所で。

エンジン音が近づく。フロントガラスの向こう側、運転席にはつきりと狐の面が見えた。

それを確認してから、もう一度、飛ぶ。

あ、失敗！

宙に浮いた私の体の下を、猛スピードで車が通過する。

あと一步遅れてたら、完全にひかれてた。

妙に冷静に考える余裕があったのは、落下までにやたらと時間がかかったからなの。……あのね、飛びすぎちゃった。

しかも、落下点まで間違えた。大きな木の枝に着地した私は、ついでにその高い場所から車の行方を追ってみただけど、無駄だった。

カーブを過ぎたらすぐに見えなくなっちゃって。どっちにしても山は一本道だから、車の行き先が月並町だってことは変わらないんだけど。

「おい」

木の上にいる私を堂本さんが呼ぶ。相変わらずぶっくらぼつな口調で、

「トランクス見えてンぞ」

「きゃあああ！」

ああもう！ この人つてばどうしてこうなの！

ていうか、見られた。知られた！ 最悪だ。泣きそう。

でも、堂本さんはそんなにびっくりしてないみたい。

もしかして、知ってた？

ああ、そうか。私の魔法を知ってるんだから、みすずさんが一緒に話をしてもおかしくはない。

地面に飛び降りた私は、堂本さんとどんな顔をして話せばいいのかわからない。

「助けられたな。ありがとう」

堂本さんでも、お礼、言うんだ。いつも偉そうなこととか嫌みとかばっかり言うから、意外だった。

「どういたしまして」

つい、その顔をまじまじと見てしまう。

「あの、さっきのは……」

「俺の周りを嗅ぎ回ってる連中だろ。巻き込んで悪かったな」

「じゃあ、魔法使いは関係ないの？」

「さあな。心当たりが多すぎて、そっち絡みなのか会社絡みなのか

家絡みなのかわかんねえ」

「何それ」

呆れた。もしかしたら、死んでたかもしれないのに、けろっとした顔で言うんだもん。

「堂本さん、私がいなかったら死んでたんだよ！」

「あん？ 今さら恩売ろうってンのか？」

「そうじゃない、けど……」

そういう言い方をされると腹が立つじゃない。私の言葉をどう受け取ったのか知らないけど、堂本さんは、じゃあ、と一つ提案する。「借り作っただまじや気持ちワリーから、イイこと教えといてやるよ」

「いいこと？」

尋ね返した私に、堂本さんはニヤリと笑った。

「もしお前に何かあって、どうしても困った時は、『公衆電話』を探せ」

「へ？」

きょとんとしてしまう。

だって、携帯電話があるんだよ。今の時代、公衆電話なんて誰も使わない。っていうかよく考えたら私、一度も使ったことがないかも。

堂本さんはそれ以上の説明をしてくれなかった。その視線は、私を飛び越えて道の向こう側に向けられている。振り返って見てみたら、校舎の方角から小走りにやってくるみすずさんがいた。

すっごく心配そうな顔で、息を切らして。

もう一度、堂本さんの顔を見た。皺の刻まれた目元が酷く悲しげで、愛おしげで、みすずさんを見ているその表情に、ぐっと胸がつかえる。

知ってるよ、こっぴどい顔。

私、わかっちゃった。だって、隠しもしないんだもん。この人、無意識なのかな。だとしたら、私も周りにバレてるのかもしれない。

先生を見ている時の顔が、こんな表情だったら。

つまりね、この人は、私と一緒になんだ。

「みずずさんのこと、昔から好きなんですか？」

走ってくるみずずさんへと視線を向けて、尋ねてみた。みずずさんがここに辿り着くまでにはまだ少し、距離がある。

「諦めようって思ったこと、ないんですか？」

反応を待たずに重ねて問う。

「学生のころ、ほかの人を好きになったことは？」

ゆっくりと堂本さんを見上げる。思いのほか、疲れている大人の男の人の顔があつて、哀れに思った。

「ある」

小さく、乾いた唇が動く。感情を伴わない声だった。

「そう、ですか」

それでどうなったかは聞かなかった。どうにかなってたら、きっと今、堂本さんはここにはいない。

私は、どうなるのかな。

ほかの誰かを好きになるのかな。

誰か……。ふっと浮かんだ顔を慌てて打ち消す。

コウ君はそんなじゃない。写真を撮らせてあげるだけ。

そう、私はまだ先生の事が好きで、どうしようもなく好きで、今はそれでいい。みずずさんが教えてくれたから。

夏休み明けの教室で先生の顔を見るのは辛いかもしれないけど、三島先生を見て苦しい思いをするかもしれないけど、それでも好きなんだから。それくらい好きな人なんだから、しょうがないよ。

今はゆっくり向き合っていこう。例えば、次の恋が始まるまでは、焦らず、ゆっくり。

だけど恋に障害は付きものみたいで、私はコウ君に会うことができなかつた。

事件の後、すぐに川辺に行ってみたけど、コウ君の姿はなかったんだ。しばらく待ってみてもダメで、次の日も、その次の日も、夏休みの最後の日になっても、コウ君は来てくれなかった。

何かあったのかなって心配して、もしかしたら冗談だったのかなって傷ついて、でも、ほっとしてる私もどこかにいて。

こんな時、おジイならどうするんだろう。わからないことがあると、私はいつもおジイに聞くの。おジイは皺だらけの手は軽快にキーボードを叩いて、あっと言う間に答えを見つけ出しちゃうんだよ。もちろん、おジイ自身が教えてくれることもたくさんある。

答えをくれないこともあるんだけどね。そんな時は代わりに、答えを導き出す方法やヒントを教えてください。

だから、早く。早く、おジイに会いに行かなくちゃ。何から話そうかな。

先生のこと、コウ君のこと、堂本さんのこと、みすずさんのこと、美佳ちゃんのこと、直登君のこと、魔法使いのこと。

私は走って喫茶またたびに向かう。駆け抜ける商店街は、夏休みの最終日だからかな。いつもより人が多いみたい。

それに、開いている店が多い？

夕方にはいつもシャッター街みたいになってるのに。あれ？ あんなところにカフェなんてあったっけ？

新しくできたのかな。

こっちも、今までなかったよね、クレープ店なんて。コンビニの隣にも新しいうどん屋さん。

何か変だ。

町が、変わってる。

私がない夏の間、知らない町みたい。足取りを急がせる。

ああもう！ だからセーラー服ならもっと早く走れるのに。しょうがないんだ。

念のため、あの後もなるべく魔法を使わないことに決めたから。

特に危ないことはなかったんだけどね。

現像に出したインスタントカメラに写っていたのは、私と堂本さん、それから、不意打ちのフラッシュをたかれた時の私のびっくりした顔。

ほかには何も写ってなかったらしい。っていうのは、後から堂本さんから聞いた話だ。

喫茶またたびの赤い屋根が見えて、私はやっと、帰ってきた気分になる。

もちろん、本当の家には先に帰って荷物だけ置いてきてるよ。お母さんにしか会ってないけど。

お姉ちゃんはお盆を過ぎてしばらくしたら一人暮らしの部屋に帰ったみたい。顔を合わさずに済んで良かった。

いつもどおりの喫茶店の古びたドアを開ける。いつもどおりのマスターが私を迎えてくれる。コーヒーマスターと一緒に。

いつもの定位置　デスクトップパソコンのある席に、いつもどおりのおジイの姿　を探す。

いつもの場所には、空っぽのイスと、電源の入ってないパソコンが置いてあるだけ。

「マスターっ……おジイは!？」

走ってきたせいで息が切れてる。呼吸を整えるよりも先に尋ねる私に、マスターはちよっと困ったような顔をして、首を横に振った。

おジイがいない。

この夏はいろんなことがあったけど、私にとってはこれが一番の
大事件。

夏休み最後の日。

おジイが、私たちの前から姿を消した。

君がいない夏(7) (後書き)

君がいない夏シリーズはここで終わり。

え、ここで？という感じですが終わりです。

こんな終わり方なので次の話はなるべく早くに入りたいな、と思いつつ、秋に追いつかれないように頑張ります。

僕らは魔法を使えない(1)(仮)(前書き)

夏休みが終わるころ、ジイさんが消えた。再会した俺とあきちゃん
のまわりで起こる事件。あきちゃんの泣き顔と幸せのチエーンメー
ル。そして次に狙われるのは？ シリーズ第三弾。夏の続きがいま、
始まる！

僕らは魔法を使えない(1)(仮)

今、俺の目の前にはあきちゃんがいる。

使っていない古いコンポとこの春に買ったばかりのノートパソコンがなかよく同居する机のとなりに、あきちゃんがいる。脱ぎ散らかした服に占領されたベッドを背にして。あきちゃんが床に転がった骨董品みたいなバイクのヘルメットをけげんそうに見るから、車を買ってからバイクには乗らなくなったんだと、俺は聞かれてもいないのに説明する。

セーラー服からのぞく細い足を体育座りでかかえて、あきちゃんはすこし泣きそうな顔をしていた。たぶん、本当に聞きたいのはそんなことじゃないんだろう。

「吏一君……」

心細そうに、あきちゃんが俺の名前を呼んだ。今すぐ抱きしめたくなる衝動を、右手をにぎってやりすごす。

「大丈夫だよ」

俺はあきちゃんの不安の正体などさっぱりわかっていないくせに、無責任な言葉をかけた。

「ほんとうに？」

うるんだ目で見あげられたら やべ、かわいい。にぎりしめた手につめが食いこむ。どうしろってんだ。直視してられなくて視線をわずかにずらしたら、ベッドの上に投げっぱなしの工口本を見つけた。

どうか、あきちゃんがうしろを振り向きませんように。

「吏一君は私を、受けいれてくれる……？」

急に立ちあがったあきちゃんは、向かいに座っていた俺を見おろす格好になる。すらりと伸びた生足のなめらかなひざ小僧を目の前にして、俺は目のやり場に困ったりしたわけだが、そんなことより、急にどうしたの？ とたずねるよりも先に、あきちゃんは胸のまえ

で交差させた両手をセーラー服の白いすそにかけ、ゆっくりと持ち上げていく。脂肪のすくない白いお腹が見えて、ごくりとつばを飲みこんだ。

そんなことしたらダメだ、あきちゃん。一体どうしたんだよ!? 止めないと、と理性は叫んでいるのに、俺の頭は、いかにしてエロ本に気づかれずにベッドにうまく押し倒すかってことばかりを考えていた。ところで目が覚めた。

天井に貼ったKREVAのポスターが、まるでファンタジーだと笑っていた。

ですよね。かわいた笑いがむなしく響いた。

つか、どうせ夢ならさっさと押し倒せよ!

汗だくのシャツを脱いで、ベッドの足もとに転がるエロ本に向かって投げつける。部屋の温度は三十度を軽くこえていた。残暑だ。照りつける日差しはまだ強い。九月に入ったからといって、今日から秋ですとはいかないのだ。俺が未だあきちゃんに会えないままずるずるとバイトの日々を続けているのと同じように。

さすがにもうセミのうるさい声で起こされることはなくなったものの、だからといってあんな夢を見たあとの寝覚めがいいわけがない。だるい体にムチをうつて午後からのバイトに出掛ける準備をしながら、パソコンメールをチェックする。受信メールは一件だけ。差出人は「魔法使いのジイさん」。内容にざっと目を通して、了解とだけ返事をして部屋を出る。

たつぷりと日差しをあびて熱くなった車のなかをエアコンで冷やすあいだ、フロントガラスに降参ポーズで転がったセミをそっと木の根元に移しておいた。ぴくりとも動かない。妙に感傷的なきぶんになっているのは、夏の終わりのせいだ。大学の夏休みはあとひと月残ってはいいたが。

冷房をガンガンに効かせた車で、近所の椅子屋のまえを通りすぎようとしたときだ。しゃれた店の前に店主の姿を見つけ、あいさつ代わりにクラクション二つ。こちらに気づいたきつねのような面が

振り返り、愛想よく片手をあげる。こちらに手のひらを突き出した椅子屋の唇が「ちよつと待って」と動いた気がして、ゆるやかにブレーキを踏む。

一度店のなかへと引っこんで戻ってきた多聞は、手に持ったものでこつんと運転席の窓ガラスをたたく。開けた窓からぬるい風とともに多聞の声が聞こえた。

「前に話してたCD」

「ああ、サンキュ」

前に、俺が貸してくれと頼んでいたものだ。この男に関しては初対面の印象こそ最悪だったが、音楽の趣味は不思議とよく合った。

店の奥の一部屋がレコードやCDのコレクションでいっぱいになっていることを知ってから、こうやって発掘されたCDを貸してもらう間柄だ。大学を中退してしばらくヨーロッパを転々としていた椅子屋は洋楽には特に強い。英語が話せるならTOEICの試験を代わりに受けてくれつつたら断られたけど。

「今からバイト？ 働くね。大学生はまだ夏休みなんだっけ？」

「そう、九月まで。そっちは暇そうだな」

「大学生よりはね」

椅子屋は涼しい顔をして、いやみをさらりとかわした。

実際のところヒマなのだろう。この椅子屋に客が入っているとこゝろを俺は一度も見たことがない。そりゃそうだ。こんな住宅地の真ん中で、いったい誰がわざわざ訪ねてくるんだ？ これで経営が成り立つのかと聞いてみたら、販売はもっぱらWEBショップ経由らしい。たぶんそれだけじゃないんだろうけど。

ちょうど後続車がきたところで多聞に別れを告げ、俺はバイト先の「ムーン&リバー」へと向かう。九月に入っただばかりの最初の土曜日というのは、世間的には夏休みの延長線上らしい。若い奥さまの集団や派手なギャルのグループ、暑くるしいカップルの注文を聞きながら、間のスリーptimeはあつという間にすぎた。こういう忙しい日にかぎって店長である川岸が休みをとっているのはいやが

らせだろつか。

ようやく、涼しげなノースリーブの女性客で目の保養をする程度の余裕ができたころには、夕方の休けい時間になっていた。

「新沼さん、お客さんからご指名ですよ。まだ中学生かっくら子子供っぽいけど将来有望って感じ。初めて見る子ですけど、またアレっすかね」

奥に引っ込んで早い夕飯を食べていた俺を、もう一人のバイトが手招きする。言われてもすぐにはぴんとこない。モテモテですね、とからかうバイトの後輩を無視して、食べかけのカレーを置き、フロアに出る。カウンターの隅に、一人で心細げに座っている女の子がいた。

俺はまた、夢か幻でも見てるんじゃないかと思ったんだ。だって将来有望どころか、

「吏一君……」

なんでそんな不安そうな目で見るんだよ。これじゃまるで夢と一緒じゃないか。困ったことに俺は、夢であんなことをしてしまった罪悪感で彼女を直視することができない。幸いにも場所と、彼女の着ている服はちがったけど。

「久しぶり、あきちゃん。セーラー服じゃなかったから、ちよつとビックリした」

「あ、うん。休日だから」

そうだよな。なんでそんな当たり前のことしか聞けないんだろかな。たぶん、あまりにも久しぶりすぎて舞いあがってるんだ俺は。落ち着け。

「どうしてあきちゃんがここに？」

「吏一君に会いにきたの」

ちよつと待ってくれ。俺はまだ夢でも見てるんだろつか。あまりにも都合が良すぎないだろつか。一度落ち着かせたはずの心臓をいとも簡単に乱してくれる今日のアきちゃんの攻撃力はハンパではない。

「『またたび』で待っても会えないから、マスターにここの場所聞いたの。お仕事中午のにごめんさい。どうしても吏一君と話したいくて」

あきちゃんは、俺の返事がないのを気にしたのだろう。申し訳なさそうに説明を加える。

「いや、大丈夫。忙しい時間は過ぎたから。俺も、あきちゃんに会いたかったから九月になったら『またたび』にも顔だそうと思ってただけど、毎日バイト入って。八月中は、あきちゃん来ないって俺もマスターから聞いてたし」

「そうなんだ。会いにきてくれてたんだね。ごめん。夏休み中は小生のお世話の手伝いをして……」

なんだか回りくどい会話だ。会えなかった一カ月の間を必死に探って、埋めるような。少なくとも俺はそんな気分で。その上、あきちゃんも俺のことを気にしてくれていた。うれしい。つか、かなりいい感じなんじゃねえの？ このままの勢いでデートに誘えば、と切り出すタイミングを計っていた俺に、あきちゃんは意を決したように顔を上げて、

「あのね、吏一君。おジイがいなくなっちゃった、の……」

ひどく悲しげに言ったのだ。うるんだ目で俺を見上げて。不安でたまらないって感じで。こまかいドット柄のシャツに包まれた華奢な肩を震わせて。抱きしめたい衝動を俺は現実でもこらえなければいけない羽目になった。なのに、なんでそこでジイさんが出てくるんだ！

ため息をつきたくなるのをこらえてから、

「ジイさんなら今朝ちょうどメールがきたよ」

「えっ本当！？ でも、またたびには一週間以上きてないんだよ。家に行っても留守だし」

くもっていたあきちゃんの表情がすこしだけ明るくなったのも束の間、ふたたび声が深く沈む。

「家にもいないのは、確かに変だな」

あきちゃんはこくりと静かに頷く。

ジイさんはパソコンを扱う魔法使いだ。それも、デスクトップ専用の。ノートパソコンもタブレット端末もスマートフォンもダメなんだと。もし、ジイさんが本当に家にずっといないのだとしたら、俺に送ってきたメールは一体どこから？ それこそ喫茶またたび以外に、俺はジイさんの出没場所を知らない。

「家族はなにも言っただけでなかったの？」

俺が思いつくのはこの程度。しかしあきちゃんはすぐに首を横にふって

「おジイは一人暮らしなんだよ」

「あの歳で？」

確かに九十にしては元気なジイさんだけど、驚いた。ジイさんの家は聞くとところによると町内では有名な旧家だ。てつきり、孫にかこまれて気ままな隠居生活を送ってるものだと思っていた。

念のため、スマートフォンでスカイプを確認する。ジイさんはオンラインだ。

「ねえ、おジイからのメールは？ どんな内容だったの？」

あきちゃんはカウンターから身を乗り出すようにして尋ねてくる。

「ああ、ただの依頼メールだよ。ときどき、ジイさんからの頼みごとを引き受けてんの」

あきちゃんの件で呼び出されたときも同じだ。ジイさんが俺の魔法が役立つと判断したときに、お呼び出しがかかるってわけ。

「どんなお願い？」

あきちゃんの追及には、答えるかどうか一瞬迷った。まあどうせたいしたことないことだし。

「ネットで月並町に爆破予告してる魔法使いがいるから、念のため行って見てくれって」

「爆破予告！？」

あきちゃんの声が急に大きくなる。接客中の後輩がなにごとかと振り向いたのを、なんでもないと手で追い払って、

「よくあるイタズラだよ」

「危なくないの……?」

「ジイさんが持ってきた話だから大丈夫だろ。あの人は本当は全部わかってんじゃないかってたまに思うよ」

ジイさんはインターネット回線につながっているデスクトップパソコンのなかに入り込めるらしい。具体的にどうやって入り込むのかは知らないが、俺が眼鏡をかけたときに見えるものやわかってしまうことを上手く他人に説明できないのと同じで、ジイさんがその気になればネット回線につないであるほかのパソコンの中身を丸ごとのぞき見することだってできる。セキュリティの効かない、やっかいなハッカーみたいなものだ。

だから今回の爆破予告犯のことも、危険がないことをたぶんジイさんは知っている。もしくは、俺になら止められると判断しているか、だ。俺に振られる依頼なんていつも大したことないものばかりなので、どちらにしても身の危険を感じる必要はないだろう。

「でも、もしもおジイの身に何かがあったとして、吏一君までいなくなっちゃったら……」

あきちゃんはまだ不安そうな顔をしている。好きな子に心配されるのは悪い気分ではない。ジイさんの行方のことまでは俺にはなんとも言えないが、自分のことは大丈夫だと胸を張って言える。

「あきちゃん、俺は」

「そうだ、私も行く!」

「え?」

カツコイイ台詞で頼もしく決めようとしていた言葉はあっけなく破壊された。

「私も、吏一君と一緒に爆破予告犯を捕まえに行く!」

「それはダメ。あきちゃんまで危険な目にあわせるわけにはいかないだろ」

「大丈夫。危険はないんでしょ? それに私、吏一君よりも強いよ。もし犯人がいたら捕まえるのに私の力が必要だと思うの」

ぜつたい。と断言されて、情けないことに俺はなにも言い返せなかった。脳裏によみがえるのは、あきちゃんの華麗な跳び蹴りに、吹っ飛ぶスキンヘッド。現実には、彼女の力を一度目の前で見てしまったら。「それで、いつ行くの？」と食い下がる彼女に、俺は力なく「明日」と答えるしかなかったのだ。

日曜日だというのに、タイミングよくバイトは休みだった。だからジイさんからのメールにもすぐオーケーが出せたんだけど。

町内唯一の映画館の前で、はやりの邦画のチケットを二枚買って待つシチュエーションだけを見れば、完全にデートだ。

「ごめんなさい、遅くなっちゃった!」

セーラー服の彼女が小走りに駆けてくる。

「いや、俺も今きたところ」

こんなベタな台詞のやりとりをしてみても、残念ながらデートの中身は所詮、爆破予告犯の様子見でしかない。ジイさんのメールに添付されてきた爆破予告には、爆弾を仕掛ける映画館だけでなく、上映作品と時間まで指定されていた。おかしな話だ。ここまで具体的な予告なら、ジイさんが警察や映画館側に注意くらい呼びかけていてもおかしくないのに、館内にはそんな様子はまったく見かけない。何か、事を大きくできない事情があるのか。かぎられた情報のなかでは予想を立てることくらいしかできない。

それに、この爆破予告がどのネット掲示板に投稿されたものか知らないが、もうすこし話題にのぼっても良さそうなものだ。検索もかけたし、ツイッターやフェイスブックでもそれらしい情報を探してみたが、一切ヒットしなかった。

あきちゃんが心配している、とジイさんにあてて送ったメールの返事もこない。あきちゃんの言うとおり、ジイさんを取り巻く何かがおかしいのは確かだ。

この爆破予告がジイさんに連絡がつかないことと関係しているのはわからないが、映画館にくること以外に今のところ俺がジイさんやあきちゃんにしてやれることはなさそうだった。

「恋愛ものだね」

最後列、真ん中の席についてから、あきちゃんは映画の半券を見てぼつりと言った。俺はその言葉の意味を深く考えずにあいまいに頷く。これがあきちゃんとの初デートと呼べるのかはわからないが、好きな子と初めてとなり並んで見る映画はいつも落ち着かなくて、内容など頭に入らない。

それに今日は大事な仕事がある。劇場内の照明が落ちたあと、映画の予告が始まる前に眼鏡を準備する。レンズ越しの目に真っ先に飛び込んできたとなりの青い光は、あきちゃんだ。セーラー服に身を包む体全体が、水の中にいるみたいに青く揺らめく光のなかにある。明るさに目が慣れるまでには、すこし時間が必要だった。できるかぎりとなりを見ないようにしながら会場内を見渡してみる。それらしい魔法の光はどこにもない。やっぱりただのイタズラだろうか。ジイさんのメールには「念のため」と書いてあった。爆破予告犯がないのならば、俺は気がねなくあきちゃんとのデートを楽しむだけだ。

そんな目論見もつかの間、映画の三分の一が終わったところに、それを見つけてしまった。その光はあまりにも薄すぎて、最初はただの見まちがいかと思った。眼鏡をかけ直し、もう一度見てみる。

右手前方にぼんやりとした膜のようなものが揺らめいた。あきちゃんの色やスクリーンが明るいせいもあるかもしれないが、それにしては頼りない光だ。色も、白か灰色か判然としない。すこし目を離すとすぐに見失ってしまう。幸いにも、魔法使いらしき光の主は席を立つ様子はない。視界のはしに光を監視しながら、俺はスクリーンへと目を戻した。

「あきちゃん、前から四列目の右から五番目だ」

映画がクライマックスに入るころ、そっと耳打ちする。ちいさく

頷いたあきちゃんの目尻にうつすらと涙がたまっていることに気づいて、俺は動揺した。映画の内容なんか正直、ほとんど気にしてなかったのだが、スクリーンのなかでは恋人同士が別れ話の真っ最中で、お互いに好き合っているのに、いろんな大人の事情が重なってどうしても別れなければいけない。そういう話だった。

好きなだけでは、一緒にいられない。

ほんの一カ月半前に失恋したばかりのあきちゃんは、どんな思いでこれを見ているのだろう。しずかにエンドロールが流れるなか、ぼんやりとした淡い色が、客席から動いた。

「あきちゃん、動ける？」

泣いているのかと思っただけで、あきちゃんはすぐに立ち上がった。未だスクリーンに見入っている人々の邪魔をしないよう、背を屈めて光を追う。

劇場を出て入り口へと早足に向かう背を追う。魔法使いらしき人物は、スーツ姿の小柄な男だった。落ち着かなげにあたりを見まわす様子は、あきらかに挙動不審だ。

「なあ、ちよつとあんた」

俺がうしろから声をかける。驚いて振り返った男は俺を見て、ひとつ小さく悲鳴を上げた。失礼なやつだ。

「ちよつと聞きたいことが……」

逃げられないように捕まえておこうと手を伸ばす前に、男の腕が動いた。このクソ暑いのにきっちりと首もとまで留めたシャツのボタンを、自らの指先で、強く、押した。男の指先とボタンをとりまく灰色の光。ぼんやりとしていたはずのその光は、指先がボタンに触れた途端、強い銀色に変わって、眼鏡をかけた俺の目だけを焼く。ほとんど同時に、火災報知器の音が映画館の建物いっぱいに鳴りひびいた。

「……てめえっ何しやがった！」

観客が一齐に劇場から出てくる。その混乱に乗じて男も逃げようとした。が、俺のとなりでセーラー服の襟がひるがえるほうが早い。

あきちゃんの右ストレートは、軟弱そうな男のみぞおちに綺麗にきまった。たのもしすぎるぜ、あきちゃん。うめき声をあげ、倒れ込みそうになる男を支えながら人の流れに乗って外へと出る。

火災報知器は相変わらずやかましく鳴っていたが、小さな映画館に火事の起きた気配はない。

誤作動か、と周囲の誰かが呟いた。

そうじゃない。

「この人がやったの？」

あきちゃんの視線はスーツの男に向けられている。男は意識こそ失っていないものの、俺に支えられてようやく立っているような状態だ。

「どんだけ弱いんだよ。……もしくは、あきちゃんが強すぎるのか。」

「ご、誤解だ！ 僕は、ただ……」

「なにが誤解だ。爆破予告とか物騒なことしやがって」

「え……ええっ！？ 爆破予告！ そ、そんなことしない、僕じゃないっ」

男は大げさなくらい首を横にふって否定する。演技にしては、小心者っぷりが板につきすぎていた。黒目がちな両目は視線が定まらず、まるで敵に狙われた小動物だ。これでは自分のほうが悪者な気分になってくる。

「でもあんた、魔法使いだろ？」

「ど、どうしてそれを！？」

過剰反応。嘘をつく余裕などなさそうだ。

「ボタン。押すんだらう……？」

にやりと不敵な笑みを見せて、カマをかける。男の首もとを締めつけるシャツの第一ボタン。そこを指先で弾いて指摘してやると、

「う……はい」

男はあっさりと白状した。いいのかよそれで。

「火災報知器を鳴らしたんだな」

「……はい」

思ったとおりか。男が自分のボタンを押したのと、火災報知器が鳴り出したタイミングは、偶然と呼ぶにはあまりにも出来すぎていて。

「遠隔スイッチみたいなものか。で、爆弾もここ押せば爆発する仕掛けなわけ？」

「ち、違う！　そ、そそそそんなこと僕には無理だ！」

「……確かに。そんな大それたことできるようには見えないんだよな」

「でも、どうして逃げようとしたの？」

あきちゃんに顔をのぞき込まれた男は、あろうことか頬を赤く染めて顔をそらした。おいおい。

「そ、それは……」

「……もう一回、やっちゃおう？」

しかし笑顔で左手で拳を作るあきちゃんもなかなか、なんつーか……可愛いからしょうがないけど。

男は男で今度は青くなっちまって。忙しいな。

「わ、わかった。話すよ。そういう指示があつたんだ。あの映画を見た後でもし誰かに声をかけられたら火災報知器を鳴らして全力で逃げろって、さ」

「なんだそりゃ」

「誰がそんなこと言ったの？」

あきちゃんは優しい声で重ねて尋ねる。拳は握ったままだったけど。

「君らも月並町の人間なら名前くらい聞いたことあるだろ。堂本の家、長老だ」

ある人は長老と呼び、またある人は魔法使いのおじいさんと呼ぶ。あきちゃんがおジイと呼び、俺はジイさんと呼ぶ。その呼び名はすべてただ一人の人物　堂本治一郎（どうもと じいちろう）を指していることを、俺やあきちゃんが知らないはずはなかった。

なあ、こいつは一体どういことなんだ。ジイさん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9908s/>

月並町の魔法使い

2011年10月4日03時31分発行